

翻訳：シラーの詩 7 編

渡 部 重 美

【解題】

抒情詩が文字通り「情を抒する」、つまり感情をうたい上げるものとしたら、シラー (Friedrich Schiller, 1759-1805) には抒情詩とは言えないほど観念的な内容のものが多く、この点で、人の心の微妙な機微を的確にとらえて具体的に描き出すゲーテ (Johann Wolfgang Goethe, 1749-1832) には、はるかに及ばないと言えるだろう。例えば、ともに「恋愛詩 (Liebeslyrik)」に分類される下記二つの詩を比較してみれば、その違いは明らかである¹⁾。

まずは、ゲーテの『エグモント (Egmont. Ein Trauerspiel in fünf Aufzügen)』第3幕「クレールヒェンの住まい (Clärchens Wohnung)」の場面で、主人公エグモントに想いを寄せるクレールヒェンがうたう歌を見てみよう。「フランクフルター・アルゲマイネ (Frankfurter Allgemeine)」紙で長年文芸批評を担当していた、ドイツの有名な批評家ライヒ＝ラニツキ (Marcel Reich-Ranicki) が、「ドイツ語で書かれた最も美しく、最も完璧な恋愛詩」²⁾と評したこの詩では、最大限の振幅で揺れ動きながらも、しかし、結局は幸せ一杯の「恋する心」がとても素朴に、ストレートに、自然に描き出されている。

Freudvoll	喜んだり
und leidvoll	悲しんだり
gedankenvoll sein,	物思いに沈んだり、
Langen	求めたり

und bangen	心配になったり
in schwebender Pein,	心揺らめき苦しみながら、
Himmelhoch jauchzend	天にとどくほど歓声を上げたり、
zum Tode betrübt,	死ぬほど落ち込んでみたり、
Glücklich allein	でも、幸せなのが
ist die Seele die liebt. ³⁾	恋する心。

次は、シラーが友人たちと共同で出版した『1782年詞華集（Anthologie auf das Jahr 1782）』に収録された、「ラウラに寄せる幻想曲（Phantasie an Laura）」の一節である。ラウラという架空の女性に寄せる愛の力が、本稿に訳出する「歓喜に寄せて（An die Freude）」の、例えば「喜びは、果てしない自然の中の／力強いバネ。／喜びが、喜びが回す／大きな宇宙時計の歯車を。／喜びはつぼみから花を、／天空から恒星たちを誘い出し、／その星々を宇宙空間の中で回す、／天文学者の望遠鏡が知らない宇宙空間で。」の箇所同様、「天球と天球を結び合わす」万有引力にまで拡大解釈され、普遍化されてうたわれている。

Sonnenstäubchen paart mit Sonnenstäubchen
 Sich in trauter Harmonie,
 Sphären in einander lenkt die Liebe,
 Weltsysteme dauern nur durch sie.

Tilge sie vom Uhrwerk der Naturen -
 Trümmernd auseinander springt das All,
 In das Chaos donnern eure Welten,
 Weint, Newton, ihren Riesenfall!⁴⁾

日の光に浮かぶ塵と塵が結びあって

愛のハーモニーを奏でる、
 天球と天球を結び合わすのは愛、
 諸宇宙が存続するのも愛があればこそ。

宇宙の時計仕掛けから愛を奪えば—
 大宇宙は崩壊して雲散霧消し、
 君らの世界は轟音をたてながら崩壊する、
 泣きたまえ、天文学者たち、その大崩壊を！

このようなシラーとゲーテの決定的な違いについては、いわゆる「原植物 (Urpflanze)」⁵⁾をめぐるエピソードにもよく描き出されている。イェナ (Jena) の町で行われたある自然研究会の帰り道、たまたま一緒になったシラーに、ゲーテはイタリア旅行中、シチリア島パレルモ (Palermo) の植物園で「見た」原植物の話をし、実際に描いて見せた。これに対してシラーは、それは「理念」であると反応したという⁶⁾。「目の人 (Augenmensch)」と呼ばれたゲーテと、抽象化、概念化を得意とするシラーの特徴をとともよく伝えるエピソードである。シラー自身、自らのこのような傾向をとともよく理解していた。後に、『素朴文学と情感文学について (Über naive und sentimentalische Dichtung)』の中でシラーは、体験したことをそのままストレートに、自然な言葉で表現できる「素朴詩人」ゲーテに対して、つねに概念的思考を介して表現する自分自身を「情感詩人」と性格づけることでゲーテとの差別化を行い、自らの詩人としての存在意義を確認している⁷⁾。

他方で、三次元的な発想を必要とする戯曲の分野で振るわなかったゲーテに対して、これを得意とするシラーの「バラード (Ballade)」には、まさに戯曲的な躍動感、緊張感、臨場感溢れる作品が多い。ただし、そのバラードは長大なものが多く、あまり新しい日本語訳も見られないため、不十分なものであっても拙訳を提示する意義はあるのではないかと考える。

【翻訳】

An die Freude⁸⁾

Freude, schöner Götterfunken,
 Tochter aus Elisium⁹⁾,
 Wir betreten feuertrunken,
 Himmlische, dein Heiligtum.
 Deine Zauber binden wieder,
 Was die Mode streng geteilt,
 Alle Menschen werden Brüder,
 Wo dein sanfter Flügel weilt.

Chor

Seid umschlungen Millionen!
 Diesen Kuß der ganzen Welt!
 Brüder — überm Sternenzelt
 Muß ein lieber Vater wohnen.

Wem der große Wurf gelungen,
 Eines Freundes Freund zu sein,
 Wer ein holdes Weib errungen,
 Mische seinen Jubel ein!
 Ja — wer auch nur eine Seele
 Sein nennt auf dem Erdenrund!
 Und wer's nie gekonnt, der stehle
 Weinend sich aus diesem Bund!¹⁰⁾

Chor

Was den großen Ring bewohnt
 Huldige der Simpathie!
 Zu den Sternen leitet sie,
 Wo der *Unbekannte* thronet.

Freude trinken alle Wesen
 An den Brüsten der Natur,
 Alle Guten, alle Bösen
 Folgen ihrer Rosenspur.
 Küsse gab sie *uns* und *Reben*,
 Einen Freund, geprüft im Tod,
 Wollust ward dem Wurm gegeben,
 Und der Cherub steht vor Gott¹¹⁾.

Chor

Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahndest du den Schöpfer, Welt?
 Such ihn überm Sternenzelt,
 Über Sternen muß er wohnen.

Freude heißt die starke Feder
 In der ewigen Natur¹²⁾.
 Freude, Freude treibt die Räder
 In der großen Weltenuhr.
 Blumen lockt sie aus den Keimen,
 Sonnen aus dem Firmament,
 Sphären rollt sie in den Räumen,

Die des Sehers Rohr nicht kennt.

Chor

Froh, wie seine Sonnen fliegen,
 Durch des Himmels prächt'gen Plan,
 Laufet¹⁵⁾ Brüder eure Bahn,
 Freudig wie ein Held zum siegen.

Aus der Wahrheit Feuerspiegel
 Lächelt *sie* den Forscher an.
 Zu der Tugend steilem Hügel
 Leitet *sie* des Dulders Bahn¹⁴⁾.
 Auf des Glaubens Sonnenberge
 Sicht man *ihre* Fahnen wehn,
 Durch den Riß gesprengter Särge
Sie im Chor der Engel stehn.

Chor

Duldet mutig Millionen!
 Duldet für die bess're Welt!
 Droben überm Sternenzelt
 Wird ein großer Gott belohnen¹⁵⁾.

Göttern kann man nicht vergelten,
 Schön ist's ihnen gleich zu sein¹⁶⁾.
 Gram und Armut soll sich melden,
 Mit den Frohen sich erfreun.
 Groll und Rache sei vergessen,

Unserm Todfeind sei verziehn.
Keine Träne soll ihn pressen,
Keine Reue nage ihn.

Chor

Unser Schuldbuch sei vernichtet!
Ausgesöhnt die ganze Welt!
Brüder — überm Sternenzelt
Richtet Gott, wie wir gerichtet¹⁷⁾.

Freude sprudelt in Pokalen,
In der Traube gold'nem Blut
Trinken Sanftmut Kannibalen,
Die Verzweiflung Heldenmut — —
Brüder fliegt von euren Sitzen,
Wenn der volle Römer kreist,
Laßt den Schaum zum Himmel spritzen:
Dieses Glas dem guten Geist!

Chor

Den der Sterne Wirbel loben,
Den des Seraphs Hymne preist,
Dieses Glas dem guten Geist,
Überm Sternenzelt dort oben¹⁸⁾!

Festen Mut in schwerem Leiden,
Hülfe, wo die Unschuld weint,
Ewigkeit geschwor'nen Eiden,

Wahrheit gegen Freund und Feind,
 Männerstolz vor Königsthronen,—
 Brüder, gält es Gut und Blut —
 Dem Verdienste seine Kronen,
 Untergang der Lügenbrut.

Chor

Schließt den heil'gen Zirkel dichter,
 Schwört bei diesem gold'nen Wein:
 Dem Gelübde treu zu sein,
 Schwört es bei dem Sternenrichter!

歡喜に寄せて

喜びよ、美しい神々の火花よ、
 至福の園から来た娘よ、
 私たちは炎のように酔いしれて足を踏み入れる、
 天の娘よ、お前の聖域に。
 お前の不思議な力が再び結び合わす、
 時流が厳しく切り分けたものを。
 すべての人間は兄弟となる、
 お前の柔らかな翼が留まるところで。

合唱

抱き合おう、何百万の人々よ！
 この口づけを全世界に！
 兄弟たちよ — 星空の上には
 父なる神が住んでいるはずだ。

一人の友の友になるという、
 偉大な企てに成功した者、
 一人の愛らしい女性を勝ち取った者は、
 その喜びを分かち合おう！
 そう — たった一つの魂でも
 この地球上で自分のものと言える者は！
 そしてそれができなかった者は、こっそりと
 泣きながらこの集いより出て行け！

合唱

この全世界に住むものは、
 共に感じ合おう！
 共感星々のところへ導く、
 未知なる人の世界へと。

全ての生き物は喜びを
 自然の胸から飲む。
 良い人も、悪い人もみな
 喜びのバラの道をたどる。
 喜びは私たちに口づけとぶどう酒を、
 死の試練を経た一人の友を与えた。
 肉欲は虫けらに与えられ、
 ケルビムは神の前に立つ。

合唱

くずおれるのか、何百万の人々よ？
 造物主を予感するのか、世界よ？
 星空の上に造物主を探し求めよ！

星々の上に主は住んでいるはずだ。

喜びは、果てしない自然の中の

力強いバネ。

喜びが、喜びが回す

大きな宇宙時計の歯車を。

喜びはつぼみから花を、

天空から恒星たちを誘い出し、

その星々を宇宙空間の中で回す、

天文学者の望遠鏡が知らない宇宙空間で。

合唱

恒星たちが楽しく、

天の素晴らしい見取り図にしたがって飛ぶように、

兄弟たちよ、自分の進むべき道を行け、

勝利に向かって進む英雄のように喜び勇んで。

真理の明るく輝く鏡の中から

喜びは探究者に微笑みかける。

徳の険しい丘の上へ

喜びは耐え忍ぶ者を導く。

信仰の太陽の山の上で

喜びの旗が風になびくのが見える。

破れ壊れた棺の裂け目を通して

喜びが天使のコーラスの中に立つのが見える。

合唱

勇気を持って耐え忍べ、何百万の人々よ！

よりよい世界のために耐え忍べ！
あの星空の上で
偉大な神が報いてくれるだろう。

神々にお返しをすることはできない。
神々に似ているというのは素晴らしいことだ。
心痛と貧困は名乗り出て、
陽気な人たちと一緒に楽しみなさい。
恨みや復讐は忘れ去ろう、
不倶戴天の敵も許してあげよう、
涙が彼を押しつぶすことのないように、
後悔が彼を責め苛むことのないように。

合唱

昔のことは水に流そう！
世界中が和解しよう！
兄弟たちよ一星空の上で
神が裁く。私たちが裁いたように。

杯の中に喜びが湧き出る。
金色のぶどう酒の中に
残忍な人たちは優しさを、
絶望（した人）は英雄の勇気を飲む――
兄弟たちよ、なみなみとつがれた杯が回ってきたら、
座席からすばやく立ち上がり、
その泡を天へ飛び散らそう。
このグラスを善良な霊に！

合唱

星々の渦巻きが褒め称える霊に、
 熾天使の賛歌が褒め称える霊に、
 このグラスを善良な霊に、
 あの星空の上にいる善良な霊に！

重くのしかかる苦悩の中では確固とした勇気を、
 無実（の人）が涙するところには、救いの手を、
 たてた誓いは永遠に、
 友にも敵にも真実を、
 玉座の前では男のプライドを、—
 兄弟たちよ、生命財産にかかわろうとも—
 功績に対しては榮譽を、
 嘘つきどもには破滅を。

合唱

この神聖な集いをもっと密に、
 この金色のぶどう酒にかけて誓おう。
 たてた誓いに忠実であると、
 星々の世界の裁き手の前で誓おう！

An Emma¹⁹⁾

Weit in nebelgrauer Ferne
 Liegt mir das vergang'ne Glück,
 Nur an Einem schönen Sterne
 Weilt mit Liebe noch der Blick,

Aber wie des Sternes Pracht
Ist es nur ein Schein der Nacht.

Deckte dir der lange Schlummer,
Dir der Tod die Augen zu,
Dich besäße doch mein Kummer,
Meinem Herzen lebtest du.
Aber ach! du lebst im Licht,
Meiner Liebe lebst du nicht.

Kann der Liebe süß Verlangen,
Emma, kann's vergänglich sein?
Was dahin ist und vergangen,
Emma, kann's die Liebe sein?
Ihrer Flamme Himmelsglut,
Stirbt sie, wie ein irdisch Gut?

エマに寄せて

遠く、霧にかすむ彼方に
過ぎ去った私の幸福がある。
ただ一つの美しい星に
愛のまなざしは向いたまま。
しかし、星の美しさのように、
それは夜の輝きでしかない。

長い眠りがお前の目を覆っても、
死がお前の目を閉じたとしても、

お前のために私は悩み苦しむだろう、
 私の心の中にお前は生き続けるだろう。
 しかし、ああ！お前は光の中に生きる、
 私の愛のために生きているのではない。

愛の甘い欲求も、
 エマよ、移ろうものなのか？
 移ろい消え去るものが、
 エマよ、愛と言えるのか？
 神々しく燃える愛の炎も、
 俗世の財宝のように消えるのか？

Berglied²⁰⁾

Am Abgrund leitet der schwindliche Steg,
 Er führt zwischen Leben und Sterben,
 Es sperren die Riesen den einsamen Weg
 Und drohen dir ewig Verderben,
 Und willst du die schlafende Löwin²¹⁾ nicht wecken,
 So wandle still durch die Straße der Schrecken.

Es schwebt eine Brücke, hoch über den Rand
 Der furchtbaren Tiefe gebogen,
 Sie ward nicht erbauet von Menschenhand,
 Es hätte sich keiner verwogen,
 Der Strom braust unter ihr spat und früh,
 Speit ewig hinauf und zertrümmert sie nie.

Es öffnet sich schwarz ein schauriges *Tor*,
 Du glaubst dich im Reiche der Schatten,
 Da tut sich ein lachend Gelände hervor,
 Wo der Herbst und der Frühling sich gatten,
 Aus des Lebens Mühen und ewiger Qual
 Möcht' ich fliehen in dieses glückselige *Tal*²²⁾.

Vier *Ströme* brausen hinab in das Feld,
 Ihr Quell, der ist ewig verborgen,
 Sie fließen nach allen vier Straßen der Welt,
 Nach Abend, Nord, Mittag und Morgen,
 Und wie die Mutter sie rauschend geboren,
 Fort fliehn sie und bleiben sich ewig verloren²³⁾.

Zwei *Zinken* ragen ins Blaue der Luft,
 Hoch über der Menschen Geschlechter,
 Drauf tanzen, umschleiert mit goldenem Duft,
 Die Wolken, die himmlischen Töchter.
 Sie halten dort oben den einsamen Reihn,
 Da stellt sich kein Zeuge, kein irdischer, ein.

Es sitzt die Königin hoch und klar
 Auf unvergänglichem Throne,
 Die Stirn umkränzt sie sich wunderbar
 Mit diamantener Krone²⁴⁾,
 Drauf schießt die Sonne die Pfeile von Licht,
 Sie vergolden sie nur, und erwärmen sie nicht.

山の歌

谷底を通る、目もくらむような小道は、
生と死を分ける境界線。

一人旅するお前の行く手を遮る巨人、
絶え間なくつきまとう墜落の危険。
眠れる雌獅子を起こしたくないなら、
恐怖の道を静かに歩め。

恐ろしい谷の上に高く
弧を描いてかかる橋は、
人が造ったものではない。
造ろうと思った者もいなかった。
下ではごうごうと流れる奔流が朝から晩まで、
水しぶきを上げ続けるが、橋は決して壊れない。

不気味な門が黒々とした口を開け、
お前は黄泉の国に来たような気になる。
すると、春と秋が同時に来たような、
朗らかな土地が眼前に開ける。
人生の辛勞辛苦から解放されて、
この至福の谷に逃避したいものだ。

四つの川がごうごうとこの緑野に流れ込むが、
その源流は依然として分からないまま。
四つの川はこの世の四つの方角に向かって、
東西南北へ流れて行く。
轟音とともに産み落とされたあと、川は

流れ去ったきり、二度と戻っては来ない。

山の頂が二つ、人々の頭上高く
 天空に向かって聳え立ち、
 その上では金色の霞を身に纏って
 天の娘、雲たちが舞を舞う。
 そこで彼女らが踊り続ける孤独な輪舞を、
 この世で見た者はいない。

不滅の玉座の上には、
 高くはっきりとした輪郭で女王が座っている。
 ダイヤモンドの王冠で
 額を見事に飾っている。
 そこを狙って太陽が光の矢を放つが、
 金色に染めるばかりで、温めはしない。

Der Taucher²⁵⁾

Ballade²⁶⁾

Wer wagt es, Rittersmann oder Knapp,
 Zu tauchen in diesen Schlund?
 Einen goldnen Becher werf ich hinab,
 Verschlungen schon hat ihn der schwarze Mund.
 Wer mir den Becher kann wieder zeigen,
 Er mag ihn behalten, er ist sein eigen.

Der König²⁷⁾ spricht es und wirft von der Höh

Der Klippe, die schroff und steil
Hinaushängt in die unendliche See,
Den Becher in der Charybde Geheul.
Wer ist der Beherzte, ich frage wieder,
Zu tauchen in diese Tiefe nieder?

Und die Ritter, die Knappen um ihn her,
Vernehmen's und schweigen still,
Sehen hinab in das wilde Meer,
Und keiner den Becher gewinnen will.
Und der König zum drittenmal wieder fraget:
Ist keiner, der sich hinunter waget?

Doch alles noch stumm bleibt wie zuvor,
Und ein Edelknecht, sanft und keck,
Tritt aus der Knappen zagendem Chor,
Und den Gürtel wirft er, den Mantel weg,
Und alle die Männer umher und Frauen
Auf den herrlichen Jüngling verwundert schauen.

Und wie er tritt an des Felsen Hang,
Und blickt in den Schlund hinab,
Die Wasser, die sie hinunter schlang,
Die Charybde jetzt brüllend wiedergab,
Und wie mit des fernen Donners Getöse
Entstürzen sie schäumend dem finstern Schoße.

Und es wallet und siedet und brauset und zischt,

Wie wenn Wasser mit Feuer sich mengt,
 Bis zum Himmel sprüztet der dampfende Gischt,
 Und Flut auf Flut sich ohn' Ende drängt,
 Und will sich nimmer erschöpfen und leeren,
 Als wollte das Meer noch ein Meer gebären,

Doch endlich, da legt sich die wilde Gewalt,
 Und schwarz aus dem weißen Schaum
 Klafft hinunter ein gähnender Spalt,
 Grundlos als ging's in den Höllenraum,
 Und reißend sieht man die brandenden Wogen
 Hinab in den strudelnden Trichter gezogen²⁸⁾.

Jetzt schnell, eh' die Brandung wiederkehrt,
 Der Jüngling sich Gott befiehlt,
 Und — ein Schrei des Entsetzens wird rings gehört,
 Und schon hat ihn der Wirbel hinwegespült;
 Und geheimnisvoll über dem kühnen Schwimmer
 Schließt sich der Rachen, er zeigt sich nimmer.

Und stille wird's über dem Wasserschlund,
 In der Tiefe nur brauset es hohl,
 Und bebend hört man von Mund zu Mund:
 Hochherziger Jüngling, fahre wohl!
 Und hohler und hohler hört man's heulen,
 Und es harrt noch mit bangem, mit schrecklichem Weilen.

Und wärfst du die Krone selber hinein,

Und sprächst: wer mir bringet die Kron,
Er soll sie tragen und König sein,
Mich gelüstete nicht nach dem teuren Lohn.
Was die heulende Tiefe da unten verhehle,
Das erzählt keine lebende glückliche Seele.

Wohl manches Fahrzeug, vom Strudel gefaßt,
Schoß gäh in die Tiefe hinab,
Doch zerschmettert nur rangen sich Kiel und Mast
Hervor aus dem alles verschlingenden Grab²⁹⁾—
Und heller und heller wie Sturmes Sausen
Hört man's näher und immer näher brausen.

Und es wallet und siedet und brauset und zischt,
Wie wenn Wasser mit Feuer sich mengt,
Bis zum Himmel sprüztet der dampfende Gischt,
Und Well' auf Well' sich ohn' Ende drängt,
Und wie mit des fernen Donners Getöse
Entstürzt es brüllend dem finstern Schoße.

Und sieh! aus dem finster flutenden Schoß
Da hebet sich's schwanenweiß,
Und ein Arm und ein glänzender Nacken wird bloß
Und es rudert mit Kraft und mit emsigem Fleiß,
Und er ist's, und hoch in seiner Linken
Schwingt er den Becher mit freudigem Winken.

Und atmete lang und atmete tief,

Und begrüßte das himmlische Licht.
 Mit Frohlocken es einer dem andern rief,
 Er lebt! Er ist da! Es behielt ihn nicht.
 Aus dem Grab, aus der strudelnden Wasserhöhle
 Hat der Brave gerettet die lebende Seele.

Und er kommt, es umringt ihn die jubelnde Schar,
 Zu des Königs Füßen er sinkt,
 Den Becher reicht er ihm knieend dar,
 Und der König der lieblichen Tochter winkt,
 Die füllt ihn mit funkelndem Wein bis zum Rande,
 Und der Jüngling sich also zum König wandte:

Lang lebe der König! Es freue sich,
 Wer da atmet im rosigten Licht!
 Da unten aber ist's fürchterlich,
 Und der Mensch versuche die Götter nicht,
 Und begehre nimmer und nimmer zu schauen,
 Was sie gnädig bedecken mit Nacht und Grauen.

Es riß mich hinunter blitzesschnell,
 Da stürzt' mir aus felsigtem Schacht,
 Wildflutend entgegen ein reißender Quell,
 Mich packte des Doppelstrom's wütende Macht,
 Und wie einen Kreisel mit schwindelndem Drehen
 Trieb mich's um, ich konnte nicht widerstehen.

Da zeigte mir Gott, zu dem ich rief,

In der höchsten schrecklichen Not,
 Aus der Tiefe ragend ein Felsenriff,
 Das erfaßt' ich behend und entrann dem Tod,
 Und da hing auch der Becher an spitzen Korallen,
 Sonst wär' er ins Bodenlose gefallen.

Denn unter mir lag's noch, Bergetief,
 In purpurner Finsternis³⁰⁾ da,
 Und ob's hier dem Ohre gleich ewig schlief³¹⁾,
 Das Auge mit Schaudern hinunter sah,
 Wie's von Salamandern und Molchen und Drachen³²⁾
 Sich regt' in dem furchtbaren Höllenrachen.

Schwarz wimmelten da, in grausem Gemisch,
 Zu scheußlichen Klumpen geballt,
 Der stachlichte Roche, der Klippenfisch³³⁾,
 Des Hammers³⁴⁾ greuliche Ungestalt,
 Und dräuend wies mir die grimmigen Zähne
 Der entsetzliche Hai, des Meeres Hyäne.

Und da hing ich und war's mir mit Grausen bewußt,
 Von der menschlichen Hülfe so weit,
 Unter Larven³⁵⁾ die einzige fühlende Brust,
 Allein in der gräßlichen Einsamkeit,
 Tief unter dem Schall der menschlichen Rede
 Bei den Ungeheuern der traurigen Öde.

Und schaudernd dacht ich's, da kroch's³⁶⁾ heran,

Regte hundert Gelenke zugleich,
 Will schnappen nach mir, in des Schreckens Wahn
 Laß ich los der Koralle umklammerten Zweig,
 Gleich faßt mich der Strudel mit rasendem Toben,
 Doch es war mir zum Heil, er riß mich nach oben³⁷⁾.

Der König darob sich verwundert schier,
 Und spricht: Der Becher ist dein,
 Und diesen Ring noch bestimm' ich dir,
 Geschmückt mit dem köstlichsten Edelgestein,
 Versuchst du's noch einmal und bringst mir Kunde,
 Was du sahst auf des Meer's tief unterstem Grunde?

Das hörte die Tochter mit weichem Gefühl,
 Und mit schmeichelndem Munde sie fleht:
 Laßt Vater genug sein das grausame Spiel,
 Er hat euch bestanden, was keiner besteht,
 Und könnt ihr des Herzens Gelüsten nicht zähmen,
 So mögen die Ritter den Knappen beschämen.

Drauf der König greift nach dem Becher schnell,
 In den Strudel ihn schleudert hinein,
 Und schaffst du den Becher mir wieder zur Stell,
 So sollst du der trefflichste Ritter mir sein,
 Und sollst sie als Ehgemahl heut noch umarmen,
 Die jetzt für dich bittet mit zartem Erbarmen.

Da ergreift's ihm die Seele mit Himmelsgewalt,

Und es blitzt aus den Augen ihm kühn,
 Und er siehet erröten die schöne Gestalt,
 Und sieht sie erbleichen und sinken hin,
 Da treibt's ihn, den köstlichen Preis zu erwerben,
 Und stürzt hinunter auf Leben und Sterben.

Wohl hört man die Brandung, wohl kehrt sie zurück,
 Sie verkündigt der donnernde Schall,
 Da bückt sich's hinunter mit liebendem Blick,
 Es kommen, es kommen die Wasser all,
 Sie rauschen herauf, sie rauschen nieder,
 Den Jüngling bringt keines wieder.

海に潜る若者

バラード

「騎士か近習たちのなかでだれか、
 この深みに潜る勇気のある者はいるか？
 金杯を一つ投げ込んでみよう、
 真っ黒い口がすぐ飲み込んでしまうだろう。
 潜って取ってきてくれた者にその杯を
 くれてやる。杯はその男の物だ。」

そう言うと王は、果てしない海に
 険しく突き出した崖の頂から、
 メッシーナ海峡の大渦の中へ
 その杯を投げ込んだ。

「もう一度聞くが、この深みに潜って、

勇気を示してくれる者はいないか？」

王を取り囲む騎士や近習たちは
これを聞いても押し黙ったまま、
荒々しい海をのぞき込むばかりで、
杯を手に入れようと思う者はいなかった。
すると王は、三度同じ問いを繰り返した。
「飛び込む勇気のある者はいないのか？」

しかし、みな依然として無言のままだった。
するとある従者が、物腰柔らかくかつ大胆に、
しり込みする近習たちの中から歩み出て、
帯を解き、マントを脱ぎ捨てた。
男も女も、周囲にいた者たちはみな
びっくりして、このあっぱれな若者に注目した。

若者が崖っぶちに進み出て
下の深みをのぞき込むと、
大渦が、いったんは飲み込んだ水を、
唸り声を上げながら吐き出し、
遠雷のような音を立てて泡立ちながら、
暗い深淵から水がほとばしり出た。

たぎり、逆巻き、立ち騒ぎ、ざわめき、
まるで水が火と混じり合うかのように、
泡立つ海は天まで水しぶきを飛ばし、
波また波の押し合いへし合いが
いつ終わるともなく果てしなく続き、

海がもう一つ生まれそうな勢이었다。

しかし、荒れ狂う海が静まるとついに、
白い泡の下から黒々と
地獄に通じるかのような底なしの、
大きな亀裂がぽっかり口を開け、
どよめく波が渦を巻きながら
その口の中に吸い込まれていくのが見えた。

その時すばやく、波がまた打ち寄せる前に、
若者は神に身をゆだねて飛び込んだ。
周囲から驚きの叫び声が上がったが、
渦巻きはたちまち彼を引っさらっていった。
そして、大胆な若者の上でいわくありげに
渦は口を閉じ、彼は二度と姿を見せなかった。

海面は静かになり、
海中のどよめきがうつろに響くだけで、
人々は震えながら口々に言った。
「気高い若者よ、どうか無事で！」
海の唸り声ますますうつろに響き、
不安と恐怖の時はなおも続いた。

たとえ王が王冠そのものを投げ込んで、
「王冠を取ってきた者には王位を譲り、
その者を王にする」と言ったとしても、
そんなに高くつく報酬は欲しくはない。
唸る海が懐に何を隠し持っているか、

幸運にも生還して語り伝えた者はいない。

いく多の船が、渦に巻き込まれて
 まっ逆さまに深淵に落ち込んでいき、
 粉々に砕けた竜骨と帆柱だけが、
 すべてを飲み込む墓穴から現れた。
 嵐の轟音のようにしだいにはっきりと、
 海のどよめきがますます耳に迫ってきた。

たざり、逆巻き、立ち騒ぎ、ざわめき、
 まるで水が火と混じり合うかのように、
 泡立つ海は天まで水しぶきを飛ばし、
 波また波が果てしなく押し合いへし合い、
 まるで遠雷のような音を轟かせながら、
 暗い深淵から水がほとばしり出た。

するとどうだ！どっと押し寄せる黒い水から
 白鳥のように白い何かが現れ出て、
 やがて一本の腕と輝く首筋がはっきり見えた。
 力強く懸命に水をかくその姿は、
 まぎれもないあの若者だった。左手で高々と
 杯を振りかざし、うれしそうに合図を送った。

そして彼は、ゆっくり深呼吸をすると、
 天から降り注ぐ光を味わい楽しんだ。
 小躍りして喜びながら、人々は口々に叫んだ。
 「生きている！あそこだ！助かったんだ。
 墓穴から、渦巻く海の底から

あの勇者は生還したんだ。」

陸に上がると若者は、人々の歓声に包まれた。
彼は王の足元にひれ伏し、
跪いて杯を差し出した。
王が愛らしい娘に合図すると、
娘は杯に光り輝くワインをなみなみと注いだ。
そして、若者は王に向かってこう語り出した。

「王様万歳！バラ色の光の中で
生きられることの喜びよ！
この海の底は恐ろしいありさまでした。
人は神々を試そうなどと思ってはなりません。
神々が慈悲深く、闇と恐怖でおおい隠している
ものを、のぞき見ようなどと思ってはなりません。

またたく間に私は海中に引き込まれました。
すると岩壁に開いた穴から私に向かって、
急流が激しく噴き出してきました。
ぶつかり合う二つの流れの威力に圧倒され、
目も回るような速さで回転するコマのように
翻弄され、私は手も足も出ませんでした。

絶体絶命の窮地に追い込まれた私が
大きな声で祈ると、神は私に
海底からそびえる岩礁を指し示してくださり、
すばやくこれにしがみついて、死を免れました。
岩礁の珊瑚の先にこの杯も引っかかっており、

底知れぬ海底まで落ちずにすんだのです。

下にはまだ、山の高さに比べられるほど深く、
深紅色の闇が口を開けていました。

耳にはまったく聞こえませんでした、
下を見下ろしてぞっと身震いました。

恐ろしい地獄の口の中で
山椒魚やイモリ、竜がうごめいていたからです。

ひどく入り乱れて、気味悪い塊となって
黒々とうごめいていたのは、

とげのあるエイ、タラ、
不気味な姿のシュモクザメでした。

そして海のハイエナ、恐ろしいサメが、
凶暴な歯をむき出して威嚇してきました。

岩礁にぶら下がって、戦慄しながら思いました。
人の助けを請うには遠く離れすぎていること、
恐ろしい顔に囲まれ、自分にだけ心があること、
身の毛がよだつような孤独の中で、
人の声が届かない海中深くただ一人、
殺伐とした海の怪物たちに囲まれていることを。

こんなことを考えてぞっとしていると、
無数の関節を動かして這い寄ってきたものが、
私に食いつこうとしたので、恐怖で気が動転し、
つかんでいた珊瑚の枝を離してしまいました。
と同時に、私は猛烈な勢いで渦に飲み込まれ、

幸いなことに、海面へ押し流されたのです。」

若者の話にすっかり驚いた王は、
言った。「この杯はお前のものだ。
そして、高価な宝石をあしらった
この指輪もお前にくれてやろう、
もしお前がもう一度海に潜って、
海の奥底で見たことを話してくれるなら。」

心優しい娘はこれを聞いて、
すがるような口調で嘆願した。
「お父様、こんな悪ふざけはもうおやめください、
彼は、誰にもなし得ないことをやり遂げました。
心の欲求を抑えることができないのでしたら、
騎士たちに、彼に勝る行為をさせてください。」

これを聞くと王はすばやく杯をつかみ、
渦の中へ投げ込んだ。
「もう一度潜って杯を取ってきたら、
お前はわしの最も優れた騎士だ。
そして、同情して今お前のために嘆願した
娘を、今日中に妻として抱擁することを許す。」

この言葉が彼の心をえも言われぬ力でとらえ、
彼の目は勇ましく光り輝いた。
そして彼は、美しい娘が頬を紅潮させ、
それから青ざめてくずおれるのを見た。
この素晴らしい褒美を手に入れた一心で、

彼は生死を賭して海に飛び込んだ。

寄せては返す波の音が聞こえる。

大きな音を響かせて波が砕け散る。

娘は身を屈めて、愛情深い眼差しで下を見るが、

打ち寄せてくるのは波ばかりで、

音を立てて盛り上がっては、引いていく。

若者は二度と戻ってはこなかった。

Die Bürgschaft³⁸⁾

Ballade

Zu *Dionys*³⁹⁾ dem Tyrannen schlich

*Möros*⁴⁰⁾, den Dolch im Gewande,

Ihn schlugen die Häscher in Bande.

Was wolltest du mit dem Dolche, Sprich!

Entgegnet ihm finster der Wüterich.

»Die Stadt vom Tyrannen befreien!«

Das sollst du am Kreuze bereuen.

»Ich bin, spricht jener, zu sterben bereit,

Und bitte nicht um mein Leben,

Doch willst du Gnade mir geben,

Ich flehe dich um drei Tage Zeit,

Bis ich die Schwester dem Gatten gefreit⁴¹⁾

Ich lasse den Freund dir als Bürgen,

Ihn magst du, entrinn' ich, erwürgen⁴²⁾.«

Da lächelt der König mit arger List,
 Und spricht nach kurzem Bedenken:
 Drei Tage will ich dir schenken.
 Doch wisse! wenn sie verstrichen die Frist,
 Eh du zurück mir gegeben bist,
 So muß er statt deiner erblassen,
 Doch dir ist die Strafe erlassen.

Und er kommt zum Freunde: »der König gebeut⁴³⁾,
 Daß ich am Kreuz mit dem Leben
 Bezahle das frevelnde Streben,
 Doch will er mir gönnen drei Tage Zeit,
 Bis ich die Schwester dem Gatten gefreit,
 So bleib du dem König zum Pfande,
 Bis ich komme, zu lösen die Bande.«

Und schweigend umarmt ihn der treue Freund,
 Und liefert sich aus dem Tyrannen,
 Der andere ziehet von dannen.
 Und ehe das dritte Morgenrot scheint,
 Hat er schnell mit dem Gatten die Schwester vereint,
 Eilt heim mit sorgender Seele,
 Damit er die Frist nicht verfehle.

Da gießt unendlicher Regen herab,
 Von den Bergen stürzen die Quellen,
 Und die Bäche, die Ströme schwellen.
 Und er kommt an's Ufer mit wanderndem Stab,

Da reißet die Brücke der Strudel hinab,
 Und donnernd sprengen die Wogen
 Des Gewölbes krachenden Bogen.

Und trostlos irrt er an Ufers Rand,
 Wie weit er auch spähet und blicket,
 Und die Stimme, die rufende, schicket,
 Da stößet kein Nachen vom sichern Strand,
 Der ihn setze an das gewünschte Land,
 Kein Schiffer lenket die Fähre,
 Und der wilde Strom wird zum Meere.

Da sinkt er ans Ufer und weint und fleht,
 Die Hände zum Zeus erhoben:
 »O hemme des Stromes Toben!
 Es eilen die Stunden, im Mittag steht
 Die Sonne und wenn sie niedergeht,
 Und ich kann die Stadt nicht erreichen,
 So muß der Freund mir erleichen.«

Doch wachsend erneut sich des Stromes Wut,
 Und Welle auf Welle zerrinnet,
 Und Stunde an Stunde entrinnet,
 Da treibt ihn die Angst, da faßt er sich Mut
 Und wirft sich hinein in die brausende Flut,
 Und teilt mit gewaltigen Armen
 Den Strom, und ein Gott hat Erbarmen⁴⁴⁾.

Und gewinnt das Ufer und eilet fort,
 Und danket dem rettenden Gotte,
 Da stürzet⁴⁵⁾ die raubende Rotte
 Hervor aus des Waldes nächtlichem Ort,
 Den Pfad ihm sperrend, und schnaubet Mord
 Und hemmet des Wanderers Eile
 Mit drohend geschwungener Keule.

»Was wollt ihr? ruft er für Schrecken bleich,
 Ich habe nichts als mein Leben,
 Das muß ich dem Könige geben!«
 Und entreißt die Keule dem nächsten gleich:
 »Um des Freundes Willen erbarmet euch!«
 Und drei, mit gewaltigen Streichen,
 Erlegt er, die andern entweichen.

Und die Sonne versendet glühenden Brand,
 Und von der unendlichen Mühe
 Ermattet sinken die Kniee:
 »O hast du mich gnädig aus Räubershand,
 Aus dem Strom mich gerettet ans heilige⁴⁶⁾ Land,
 Und soll hier verschmachtend verderben,
 Und der Freund mir, der liebende, sterben!«

Und horch! da sprudelt es silberhell
 Ganz nahe, wie rieselndes Rauschen,
 Und stille hält er zu lauschen,
 Und sieh, aus dem Felsen, geschwätzig, schnell,

Springt murmelnd hervor ein lebendiger Quell,
 Und freudig bückt er sich nieder,
 Und erfrischt die brennenden Glieder.

Und die Sonne blickt durch der Zweige Grün,
 Und malt auf den glänzenden Matten
 Der Bäume gigantische Schatten;
 Und zwei Wanderer sieht er die Straße ziehn,
 Will eilenden Laufes vorüber fliehn,
 Da hört er die Worte sie sagen:
 Jetzt wird er ans Kreuz geschlagen.

Und die Angst beflügelt den eilenden Fuß,
 Ihn jagen der Sorge Qualen,
 Da schimmern in Abendrots Strahlen
 Von ferne die Zinnen von Syrakus,
 Und entgegen kommt ihm Philostratus⁴⁷⁾,
 Des Hauses redlicher Hüter,
 Der erkennt entsetzt den Gebieter:

Zurück! du rettetest den Freund nicht mehr,
 So rette das eigene Leben!
 Den Tod erleidet er eben.
 Von Stunde zu Stunde gewartet' er
 Mit hoffender Seele der Wiederkehr,
 Ihm konnte den mutigen Glauben
 Der Hohn des Tyrannen nicht rauben.

»Und ist es zu spät, und kann ich ihm nicht
 Ein Retter willkommen erscheinen,
 So soll mich der Tod ihm vereinen.
 Des rühme der blut'ge Tyrann sich nicht,
 Daß der Freund dem Freunde gebrochen die Pflicht,
 Er schlachte der Opfer zweie,
 Und glaube an Liebe und Treue.«

Und die Sonne geht unter, da steht er am Tor⁴⁸⁾
 Und sieht das Kreuz schon erhöht,
 Das die Menge gaffend umstehet,
 An dem Seile schon zieht man den Freund empor,
 Da zertrennt er gewaltig den dichten Chor:
 »Mich Henker! ruft er, erwürget,
 Da bin ich, für den er gebürget!«

Und Erstaunen ergreift das Volk umher,
 In den Armen liegen sich beide,
 Und weinen für Schmerzen und Freude.
 Da sieht man kein Auge tränenleer,
 Und zum Könige bringt man die Wundermär,
 Der fühlt ein menschliches Rühren,
 Läßt schnell vor den Thron sie führen.

Und blicket sie lange verwundert an,
 Drauf spricht er: Es ist euch gelungen,
 Ihr habt das Herz mir bezwungen,
 Und die Treue, sie ist doch kein leerer Wahn,

So nehmet auch mich zum Genossen an,
 Ich sei, gewährt mir die Bitte,
 In eurem Bunde der dritte⁴⁹⁾.

人質

バラード

暴君ディオニュシオスのもとへこっそりと
 メロスが短剣を懐に忍び込んだが、
 捕吏たちのお縄にかかった。
 「その短剣で何をするつもりだった、言え！」
 彼に向かって陰険に暴君が言った。
 「この町を暴君の手から救うのだ！」
 「磔にして後悔させてやる。」

メロスは言った。「死ぬ覚悟はできている。
 命乞いなどするつもりはないが、
 もし情けをかけてくれるのなら、
 三日間の猶予をいただき、
 妹に夫を持たせてやりたい。
 友人を人質として残しておく、
 俺が逃げたら、殺しても構わない。」

悪だくみを思いついた王はニヤッと笑い、
 しばらく考えたあとでこう言った。
 「では、三日間の猶予をやろう。
 だが覚えておけ、お前がここに戻る前に、
 猶予期間が過ぎてしまったら、

お前の代わりに友人を殺す、
お前は無罪放免にしてやろう。」

彼は友人のところに行き、言った。「王の求めで
俺は磔になり、この命をもって
しでかした暴挙の償いをすることになる。
しかし王は三日間の猶予をくれ、
妹に夫を持たせる時間ができた。
お前には王の人質になってもらいたい、
俺が戻ってきてお前の縛を解くまでの間。」

誠実な友人は何も言わずに彼を抱きしめ、
そして、暴君に身をゆだねた。
メロスは出発した。
三日目の朝、夜が明けぬうちに、
急ぎ妹の婚礼を済ませ、
期限切れにならないよう、
心配しながら帰路を急いだ。

すると、雨が果てしなく降り注ぎ、
山から滝のような水が流れてきて、
河川の水かさが増した。
彼が杖をつきながら川岸にたどり着くと、
渦巻く水が橋を引っさらい、
大きな波が轟音を立てながら、
橋のアーチを打ち砕いていた。

絶望した彼は川べりで途方に暮れた。

どんなに遠くを眺めてみても、
 どれほど叫び声を挙げてみても、
 安全な川岸を離れて、彼を
 向こう岸へ渡してくれる小船はなかった。
 渡し舟を操る船頭の姿はなく、
 激流はしだいに海のようになった。

その場で彼はへたり込み、泣きながら祈った、
 両手をゼウスに向かって高く上げながら。
 「猛り狂う川の流れを鎮めてください！
 時間はどんどん過ぎ、太陽はすでに
 南にあります。その太陽が沈む頃に、
 もし町に帰り着くことができなければ、
 友人が私のために死ぬことになるのです。」

ところが川はますます荒れ狂うばかりで、
 次から次へと波が打ち寄せては消え、
 刻一刻と時間は過ぎ去っていった。
 不安に駆られた彼は勇気を奮い起こし、
 荒れ狂う流れの中に飛び込み、
 両腕で力強く水をかき分けて進むと、
 とうとう神が慈悲をかけてくれた。

対岸に着いた彼は先を急いだ、
 助けてくれた神への感謝を忘れずに。
 すると今度は追いはぎの一団が、
 森の暗がりから飛び出してきて、
 彼の行く手を遮り、殺すぞと息まき、

棍棒を振り回して脅しながら、
道を急ぐ旅人の邪魔をした。

「何がお望みだ?」、恐怖に青ざめて彼は叫んだ、
「俺が持っている物といったらこの命だけが、
この命は王に差し出さなければならぬ!」
言うが早いか、すぐ近くの追いはぎの棍棒を奪い、
「友人のためだ、どうか情けを!」
と、力強い一撃をお見舞いして三人を倒したので、
他の追いはぎたちは逃げていった。

太陽が燃えるように熱く照りつけ、
疲労困憊していた彼は
がっくりとひざを折った。
「慈悲深く追いはぎの手から私を救い、
奔流の中を無事対岸へ渡してくださった神よ、
ここで力尽きて死ねとおっしゃるのですか。
私の友人にも死ねとおっしゃるのですか!」

するとどうだ! 明るく澄んだ音色で、
すぐ近くに、せせらぎの音がして、
彼が静かに聞き耳を立てていると、
ありがたいことに、岩間から水が、
さらさらと湧き出していた。
彼は喜び勇んで身をかがめ、
火照るからだを癒すことができた。

木洩れ日がさしてきて、

輝く草地の上に
 木々の巨大な影絵を描いた。
 すると、二人の旅人が道行くのが見え、
 急ぎ足ですれ違おうとしたところ、
 二人の交わす言葉が耳に入った。
 「そろそろ奴は磔になるぞ。」

不安に駆られた彼の足取りは、
 さらに飛ぶように速くなった。
 夕焼けの光の中で遠くに
 シラクーザの町の城壁が輝き、
 留守宅を守っていた誠実な男、
 フィロストウラトウスがやってきて、
 彼だとわかるとひどく驚いた。

「お戻りください！もう手遅れでございます。
 ご自身の身をお守りください！
 ちょうど今、ご友人は処刑されるところです。
 あの方はあなたのお帰りを
 今か今かと心待ちにしておりました。
 暴君の嘲笑ですら、
 その固い信念をくじくことはできませんでした。」

「もし手遅れで、もはや彼を
 救うことができないのならば、
 彼とともに死にたいものだ。
 友が友に対する義務を果たせなかったことを、
 残虐な暴君の自慢話にさせてはならない。」

いっそ二人とも生け贄となって
愛と誠の重みを思い知らせてやる。」

太陽が沈む頃、メロスは市門に立ち、
高々と立つ十字架を見た。
その周りにはじっと見つめる群衆。
早くも友人が縄で吊り上げられた。
彼はごった返す群集を力づくでかき分けた。
「刑吏よ、この俺を」、彼は叫んだ、「殺せ！
その男は俺の身代わり、当の俺はここにいる！」

周囲の群衆が驚くなか、
二人は固く抱き合って、
苦痛のあまり、そしてまた喜びのあまり泣いた。
涙なしにこの光景を見守る者はなかった。
王はこの美談を伝え聞き、
同じ人として心を動かされ、
さっそく二人を玉座の前に呼び出した。

そして不思議そうに二人を見つめてから、
こう言った。「お前たちの勝ちだ、
わしはお前らに圧倒された。
誠とは、それは絵空事ではないということか、
ならば、このわしもお前らの仲間に入れてほしい。
どうかこの願いを聞き入れてくれ、
わしをお前らの三人目の仲間にしてくれ。」

Gruppe aus dem Tartarus⁵⁰⁾

Horch — wie Murmeln des empörten Meeres,
 Wie durch hohler Felsen Becken weint ein Bach,
 Stöhnt dort dumpfigtief ein schweres, leeres,
 Qualerpreßtes Ach!

Schmerz verzerret
 Ihr Gesicht, Verzweiflung sperret
 Ihre Rachen fluchend auf.
 Hohl sind ihre Augen — ihre Blicke
 Spähen bang' nach des Kozytus Brücke,
 Folgen tränend seinem Trauerlauf,

Fragen sich einander ängstlich leise:
 Ob noch nicht Vollendung sei? —
 Ewigkeit schwingt über ihnen Kreise,
 Bricht die Sense des Saturns entzwei⁵¹⁾.

タルタロスの亡霊たち

聞くがいい、猛り立つ海のざわめく声を、
 岩の盆地を流れる川の泣き声を。
 そこで耳にするのは低くこもった、重苦しく、うつろな、
 苦悩のあまり漏れ出たうめき声。

苦痛にゆがむ
 彼らの顔。口から出るのは

絶望の呪いの言葉。

目はうつろに、不安げに
コキュトス川にかかる橋を見やり、
涙を流しながら、嘆きの川の流れに沿って行く。

不安げに、そっと問いかけ合う、
この苦悩はまだ終わらないのかと。
永遠が彼らの頭上で輪を描き、
サトゥルヌスの大鎌をまっぶたつに折る。

Hoffnung⁵²⁾

Es reden und träumen die Menschen viel
Von bessern künftigen Tagen,
Nach einem glücklichen goldenen Ziel
Sieht man sie rennen und jagen,
Die Welt wird alt und wird wieder jung,
Doch der Mensch hofft immer Verbesserung!

Die Hoffnung führt ihn ins Leben ein,
Sie umflattert den fröhlichen Knaben,
Den Jüngling begeistert⁵³⁾ ihr Zauberschein,
Sie wird mit dem Greis nicht begraben,
Denn beschließt er im Grabe den müden Lauf,
Noch am Grabe pflanzt er — die Hoffnung auf.

Es ist kein leerer schmeichelnder Wahn,

Erzeugt im Gehirne des Toren.
 Im Herzen kündigt es laut sich an,
 Zu was besserm sind wir geboren,
 Und was die innere Stimme spricht,
 Das täuscht die hoffende Seele nicht.

希望

人は多くを語り、さまざまに夢見る、
 将来のよりよき日々のことを。
 金色に輝く幸せな目的地を
 人は捜し求め、追い求める。
 世の中は古くなりまた若返るが、
 人はいつもよりよくなることを待望している！

希望は人に生を授け、
 快活な子どもの後見人となり、
 その不思議な輝きは青年を虜にするが、
 老人とともに葬られることはない。
 老人は墓場でその重い歩みを止めるが、
 墓場でもなお希望を掲げるからである。

これは愚か者の頭の中で生み出された、
 空虚で甘美な妄想などではない。
 心の中で大きなお告げの音がするのだ、
 「私たちは生まれながらによりよいものを目指す」。
 そして、内なる声が語ることは、
 希望に胸焦がす人を欺いたりはしない。

【注釈】

ここに掲載したのは、日本におけるドイツ年（2005-2006）を機に、東京藝術大学のご協力のもと獨協大学で企画した「シラー没後 200 年記念講演会・コンサート」（歌：河野克典氏、伴奏：小林道夫氏、講演：関徹雄・本学名誉教授、2005 年 10 月 15 日、東京藝術大学奏楽堂）用に訳したシラーの詩と、この「講演会・コンサート」が機縁となって面識を得た河野克典氏のコンサート「新・歌物語 Vol. 8 シラーの世界」（伴奏：野平一郎氏、2007 年 5 月 18 日、東京文化会館小ホール）用に新たに訳出した詩から 7 編を抽出してまとめ直したものである。

詩のドイツ語テキストは、Friedrich Schiller: Werke und Briefe in 12 Bänden. Hrsg. von O. Dann, u.a. Bd.1: Gedichte. Hrsg. von G. Kurscheidt. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1992. 所収のテキストにしたがった。原文でイタリック体になっている箇所はそのままにしたが、日本語訳では普通の字体に統一してある。さらに、上記 Deutscher Klassiker Verlag 版の各詩に対する注釈についても適宜内容を要約しつつ、必要に応じて修正・補足を加えたり、筆者なりのコメントを加筆してまとめた。以下、本稿の注釈でこの版から引用、あるいはこの版を参照した場合は FA と略記し、第 1 巻についてはページ数のみを明記することにする。

日本語訳作成にあたっては、下記既訳を参考にさせていただいた。

- ・木村謹治訳「歡喜に寄す」、「擔保」、「潜水者」（すべて、新関良三編『シラー選集 1 詩・小説』富山房、1941 年、所収）
- ・小栗孝則訳「希望」、「喜びを歌う」（すべて、小栗孝則訳『シラー瞑想詩集』小石川書房、1949 年、所収）
- ・手塚富雄訳「喜びをうたう」、「人質」、「海にくぐる若者」（すべて、新関良三他訳『シラー』筑摩書房（世界文学大系 18）、1959 年、所収）
- ・関口存男訳注「海に潜る若者」（『関口存男著作集 翻訳・創作篇 1』三修社、1994 年、所収）

なお、詩の掲載順に関しては、ドイツ語原文の表題をアルファベット順に並べてある。

- 1) 以下、「恋愛詩」に関するシラーとゲーテの比較については、日本放送協会・日本放送出版協会編『NHK ラジオドイツ語講座』2007 年 3 月号、122~126 ページに掲載した記事に若干の加筆・修正をして再録したものである。
- 2) Marcel Reich-Ranicki: Die schwebende Pein. In: Über die Liebe. Gedichte und Interpretationen aus der *Frankfurter Anthologie*. Hrsg. von M. R.-Ranicki. Frankfurt a. M. (Insel Verlag) 1985, S. 92-94, hier S. 92.
- 3) Johann Wolfgang Goethe: Egmont. Ein Trauerspiel in fünf Aufzügen. In: ders.: Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. Münchner Ausgabe (=MA). Bd. 3・1: Italien und Weimar 1786-1790. Hrsg. von N. Miller und H. Reinhardt. München (Carl Hanser Verlag) 1990, S. 246-329, hier S. 286.
- 4) FA, S. 228.
- 5) 植物の中の植物、あらゆる植物の原型。ちなみに、原植物については Ende (Michael, 1929-1995) が、あるエッセイの中でとても簡潔に、わかりやすく説明して

- いる。Vgl. Michael Ende: Die Wirklichkeit des Verborgenen. In: ders.: Zettelkasten. Skizzen & Notizen. Hrsg. von R. Hocke. München (Piper Verlag) 2011, S. 281-282.
- 6) Vgl. Johann Wolfgang Goethe: Glückliches Ereignis. In: ders.: MA, Bd. 12: Zur Naturwissenschaft überhaupt, besonders zur Morphologie. Erfahrung, Betrachtung, Folgerung, durch Lebensereignisse verbunden. Hrsg. von H. J. Becker, G. H. Müller, J. Neubauer und P. Schmidt. München (Carl Hanser Verlag) 1989, S. 86-90, hier S. 88-89.
- 7) Vgl. Friedrich Schiller: Über naive und sentimentalische Dichtung. In: ders.: FA, Bd.8: Theoretische Schriften. Hrsg. von R. -P. Janz unter Mitarbeit von H. R. Brittnacher, G. Kleiner und F. Strömer. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker Verlag) 1992, S. 706-810. また、これに関連して、つねにゲーテを意識しながら身体的に無理を重ねつつ創作にあたるシラーの様子を、Mann (Thomas, 1875-1955) はとても巧みに描き出している。Vgl. Thomas Mann: Schwere Stunde. In: ders.: Frühe Erzählungen 1893-1912. In der Fassung der Großen kommentierten Frankfurter Ausgabe. Frankfurt a. M. (S. Fischer Verlag) 2008, S. 419-428.
- 8) **An die Freude** の注釈：Vgl. FA, S. 248-251, 410-413, 1036-1040, 1132-1133.

恐らくは 1785 年の夏、Gohlis の Körner (Christian Gottfried, 1756-1831) を囲む仲間たちとの親交の中で書かれ、『ラインのタリーア (Rheinische Thalia)』誌第 2 号 (1786 年) に初稿が発表された。掲載予定だった『豪華版詩集 (Prachtausgabe der Gedichte Schillers)』用では、4 行の詩節に「合唱 (Chor)」の見出しはついておらず、また行の配列も異なっていた。

ここに訳出したのは第 2 稿で、最初の詩節の 6~7 行目「時流が厳しく切り分けたものを。／すべての人間は兄弟となる、(Was die Mode streng geteilt, / Alle Menschen werden Brüder,)」は、初稿では「時流の剣が切り分けたものを。／乞食は王侯の兄弟となる、(was der Mode Schwert geteilt; / Bettler werden Fürstenbrüder,)」となっていた。特に 7 行目に関しては、初稿では社会的身分の対立の解消がはっきりとうたわれていたが、第 2 稿ではすべての人間が兄弟のよしみを結ぶといった内容に一般化されている。

また、初稿の最後に置かれていた下記詩節が、第 2 稿では削除された。その結果、善と悪、生と死の対立を宥和しようとの大胆な要請が差し控えられることになり、詩全体は、志を同じくする者すべての同盟を訴えかける社会政策上の実践に力点をスライドさせて締め括られることになった。

Rettung von Tirannenketten,
 Großmut auch dem Bösewicht,
 Hoffnung auf den Sterbebetten,
 Gnade auf dem Hochgericht!
 Auch die Todten sollen leben!
 Brüder trinkt und stimmt ein,
 Allen Sündern soll vergeben,
 und die Hölle nicht mehr sein.

暴君の鎖からの救出を、
 悪人に対しても寛大な心を、
 臨終の床の上では希望を、
 絞首台の上では慈悲を！
 死者もまた生き返れ！
 兄弟たちよ、飲み、そして唱和しよう、
 全ての罪人を赦そう、
 そして地獄は消えてなくなれ。

<i>Chor</i>	合唱
Eine heitre Abschiedsstunde!	朗らかな別れの時!
süßen Schlaf im Leichentuch!	経帷子にくるまれて甘い眠りを!
Brüder — einen sanften Spruch	兄弟たちよ—優しい判決を
aus des Totenrichters Munde!	冥府の王の口から開け!

上記詩節の3行目については、Uz (Johann Peter, 1720-1796) の「歓喜に寄せて (An die Freude)」における、「お前にとってこの生の支配者/死は恐ろしいものではなかった、/そして死はその投げ槍を/お前に向けたが無駄だった、/悲しみの広野に行くお前には/希望が寄り添っていたからである、[後略]。(Dir war dieser Herr des Lebens / War der Tod nicht fürchterlich, / Und er schwenkte vergebens / Seinen Wurfspieß wider dich; / Weil im traurigen Gefilde / Hoffnung dir zur Seite ging, [...].)」の箇所を参照のこと。また、「合唱」の最終行「冥府の王」については、キリスト教の神や天国よりむしろ、古代の冥界を想起させるものである。

同じ『ラインのタリニア』誌に掲載された「情熱の無神論 (Freigeisterei der Leidenschaft)」と「諦念 (Resignation)」を Göschen (Georg Joachim, 1752-1828) に送付した際に、シラーは、「[前略] この2つの詩を紹介するとても重要な理由は、別の詩でこの両者を完全に否定しているからです。」と書き添えているが、シラーの念頭にあった「別の詩」とはこの「歓喜に寄せて」だったようである。

初期の頃の詩、つまり、「ラウラ」をうたった一連の詩、「愛の大勝利 (Der Triumph der Liebe)」や「友情 (Die Freundschaft)」における「愛」、「友情」、「共感」と同様に、「歓喜に寄せて」では「歓喜」が人間と自然の重要な駆動力となっている。この点でシラーは、幸福主義的傾向を帯びたイギリスの道徳哲学の影響を受けているようである。窮屈な原則を遵守するのではなく、持てる個性をすべて発揮し尽くすことこそが徳であり、そうなれば利他的な動機と利己的な動機の葛藤は解消される。人としての徳は自己否定ではなく自己実現にこそあり、必要なのは情動の抑制ではなく— Shaftesbury (Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of, 1671-1713) が「情熱に関する書簡 (A Letter Concerning Enthusiasm)」で論じているように—「情熱」であり、ありとあらゆる真・善・美に対する熱狂なのである。

1785年、シラーはますますそうした考え方に傾倒していったが、理由は、Körnerと妻の Minna (1762-1843)、Minnaの姉 Dora (Johanna Dorothea Stock, 1759-1832) とその婚約者 Huber (Ludwig Ferdinand, 1764-1804) との親交の中で、重くのしかかる生活の不安から解放されたからである。

シラーの「歓喜に寄せて」は、同じようなテーマをうたっている次のような詩とさまざまに関係している。例えば、Hagedorn (Friedrich, 1708-1754) の「歓喜に寄せて (An die Freude)」、Hagedorn を引き合いに出している Klopstock (Friedrich Gottlieb, 1724-1803) の「チューリヒ湖 (Der Zürchersee)」(25~32行目)、「歓喜に寄せて」の最初の数行と同じ韻律形式で書かれている Uz の「歓喜に寄せて」、そして、Gleim (Johann Wilhelm Ludwig, 1719-1803) の「歓喜に寄せて (An die Freude)」である。さらに、Kleist (Ewald Christian von, 1715-1759)、Cronegk (Johann Friedrich von, 1731-1758)、Hölty (Ludwig Christoph Heinrich, 1748-1776) などの詩とも関連づけて考えることができる。

Herder (Johann Gottfried, 1744-1803) は、『人類史の哲学のための諸理念

(Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit)』第2部で、『喜び』、すなわち『天の子』は、この上ない幸福として実にさまざまな形をとり、この世のあらゆる民族が目指す目標となっている。その際、個々人の幸福はみなの努力にかかっている。高貴な人間性と幸福は結び合っているのだ、——シラーの詩にうたわれているように」と述べている。このようなイメージは、自由、平等、同胞愛や友情の考えと結びついており、同時代のフリーメーソン抒情詩がうたい上げた一連のテーマの一つである。シラーは恐らくフリーメーソンだった Körner や、Leipzig のサークルの一員だった画家 Reinhart (Johann Christian, 1761-1847) などを通じて、フリーメーソン文学に接していたのであろう。フリーメーソンの詩のいくつかと類似していることが、この推測を裏付けている。

この詩の影響は、シラーが生きている頃からとても大きなものだった。評価はさまざまであり、批判は専らこの詩の神学的含意に向けられていた。100を超える曲がつけられている事実が、この詩が今日に至るまで絶え間なく盛んに受容されていることの証拠であり、中でも、Beethoven (Ludwig van, 1770-1827) の交響曲第9番でつけられた曲は依然として傑出したものである。

Klopstockはこの詩を「この世で想像し得る最も忌まわしいものである」と評価したが、後に、シラー自身も彼同様にこの詩を拒絶することになる。1800年10月21日付 Körner 宛手紙の中で、シラーはこの詩を「ひどい詩」だと呼んだ。「この詩には『欠陥があり』、あまりにも時代の趣味に迎合し過ぎており、ただその理由でのみ、いわば国民詩となる榮譽を得たのである。この詩は、作者の不完全な文学的形成過程の一段階を示すものである。」

シラーがどのような理由でこの詩を否定したのかについては、いろいろと推測が行われている。自由、平等、同胞愛といった概念は、確かに、フランス革命が推移して行く中で、シラーにとっては熱狂させる力を失ってしまっていた。また、幸福哲学も、カントの影響下で同様の運命をたどったからかも知れない。しかし、とりわけシラーには、文学上の懸念があったのであろう。つまり、直情的にアピールする「歓喜に寄せて」はムード抒情詩 (Stimmungslyrik) の一例であり、シラーは Bürger (Gottfried August, 1747-1794) の批評をした際にこの種の抒情詩を手厳しく批判し、克服してしまっていたのである。1803年6月10日付 Körner 宛手紙の中で、シラーはこの詩を最終的に単なる「パーティーの歌 (Gesellschaftslied)」に分類し、『豪華版詩集』では同じような特徴を持った一連の詩と一緒にまとめた。

- 9) Hagedorn の「歓喜に寄せて」は「喜びよ、気高き心の女神よ！ (Freude, Göttin edler Herzen!)」で始まり、5行目では「甘美な愛の陽気な姉妹よ！天の子よ！ (Muntre Schwester süßer Liebe! Himmels-Kind!)」とうたっている。Uz の同じタイトルの詩は、1行目が「喜び、賢者たちの女王 (Freude, Königin der Weisen)」となっている。Klopstock の「チューリヒ湖」では、喜びは、29行目で「女神 喜び (Göttin Freude)」、30行目で「人間性の姉妹 (Schwester der Menschlichkeit)」と呼ばれている。Gleim の「歓喜に寄せて」の歌い出しは、「天の子、喜びよ、さあ (Kind des Himmels, Freude, komm)」である。
- 10) この箇所は、同時代人たちを苛立たせることになった。Jean Paul (本名 Johann Paul Friedrich Richter, 1763-1825) は『美学入門 (Vorschule der Ästhetik)』の中で、「この詩句は、3つの字母を『こっそりと泣きながらこの集いに入って来い！ (der stehle weinend sich in unsern Bund!)』と変えることで、どれほど詩的で人間

- 的になることか」と書いている。
- 11) Uz は自身の詩「至福 (Die Glückseligkeit)」の 11 行目以降で、「至福」について同様に「その (=至福の) きずなはすべての存在を結び合わす、塵埃から熾天使に至るまで。(Ihr Band verknüpft alle Wesen, Vom Staube bis zu Cherubim.)」とうたっている。
 - 12) Leisewitz (Johann Anton, 1752-1806) の悲劇『ユリウス・フォン・タレント (Julius von Tarent)』第 3 幕第 3 場に、よく似た文言「愛はこの機械装置の中の大きなバネ (Liebe ist die grosse Feder in dieser Maschine)」が出てくる。シラーはこの悲劇を、カール学院時代からとてもよく知っていた。
 - 13) 『豪華版詩集』では Laufet ではなく Wandelt。
 - 14) 「諦念」の 27 行目ではさらに、走破しても何ら報いのない「耐え忍ぶ者のいばらの道 (des Dulders Dornenbahn)」についてうたわれている。
 - 15) Duldet に始まるこの合唱部の内容は、「諦念」における見解とは真逆である。
 - 16) ここで言及されている「喜び」の作用が、「愛の大勝利」においては「愛」に、「影の王国 (Das Reich der Schatten)」では「芸術」と「美」にあると見なされている。ちなみに、「影の王国」は第 2 稿では「理想と人生 (Das Ideal und das Leben)」という表題に改められた。
 - 17) 「マタイによる福音書」7, 2「というのも、あなた方は、あなた方自身が裁くときの法にしたがって裁かれ、あなた方自身がはかるときの尺度にしたがってはかり、割り当てられるからである」による。Vgl. Die Bibel. Nach der Übersetzung Martin Luthers. Mit Apokryphen. Stuttgart (Deutsche Bibelgesellschaft) 1985. 一方で、「フィリップ・フリーデリヒ・フォン・リーガー閣下の墓所での葬儀 (Todenfeier am Grabe des Hochwohlgeborenen Herrn, Herrn Philipp Friderich von Rieger)」68 行目では、「神は裁くのか—— 私たちのように? (Richtet GOTT— wie wir?)」とうたわれている。
 - 18) この合唱部、およびその前の 8 行部最後の 2 行では、神話的要素とキリスト教的要素、古典古代の儀式とキリスト教的信仰が混ぜこぜになっているが、これはシラーにはよく見られることである。
 - 19) **An Emma の注釈** : Vgl. FA, S. 172, 455, 960, 1148.
1796 年の終わり頃完成したと推測され、『1798 年詩神年鑑 (Musen-Almanach für das Jahr 1798)』に発表された。1797 年 7 月 6 日、曲をつけてもらうために Zelter (Carl Friedrich, 1758-1832) に送付。初稿のタイトルは「エマに寄せる悲歌 (Elegie an Emma)」で、また、第 3 詩節最後の 2 行が「愛の喜びは消え失せるが、
／愛の苦悩が消え去ることはない。(Ob der Liebe Lust auch flieht, / Ihre Pein doch nie verglüht.)」となっていた。1798 年 1 月 19 日付シラー宛の手紙で Körner が、第 3 詩節は「着想が月並みで、表現はさえず、詩句がぎこちない」と批判したことを受けて、本稿のように書き換えられた。
 - 20) **Berglied の注釈** : Vgl. FA, S. 338-339, 1100-1101.
1803 年 8 月から執筆を始めた『ヴィルヘルム・テル (Wilhelm Tell)』と平行して書かれ、『1805 年婦人文庫 (Taschenbuch für Damen auf das Jahr 1805)』に発表された。『豪華版詩集』にも掲載予定だったが、目次で触れられただけである。

1804年1月26日、シラーはこの詩を、スイスと St. Gotthardt（スイス中部にあるアルプス越えの峠で、標高2108メートル）をたびたび訪れていたゲートに、「ささやかな詩の解説課題」として送った。ゲートにはここに描写されている場所がわかり、同日シラーに、「あなたの詩には Gotthardt に向かう登山道がかなり興味深く描き出されているが、これには他にもまだいろいろと注釈を加えることができる」と伝えた。シラーが典拠としたのは、Fäsi (Johann Conrad, 1727-1790) の『全ヘルヴェチア同盟の国勢および地誌 (Staats- und Erd-Beschreibung der ganzen Helvetischen Eidgenöfschaft)』である。描写されているのは、1行目から24行目までが Göschenen から Teufelsbrücke に至り Urner Loch を通り抜けて Urserental へ続く道、最後の2つの詩節が描いている場所については一義的に特定することはできない。

『ヴィルヘルム・テル』の第5幕第2場、テルが Parricida にイタリアへ行く道を説明している3241行から3270行は、以下の通りこの詩の内容に対応している。ちなみに、Parricida「父親殺し、肉親殺し、尊属殺人犯」の通称で呼ばれているのは、Schwaben 公 Johann (1290頃-1313頃) のことである。Johann は、ハプスブルク家最初のドイツ王であり神聖ローマ皇帝である Rudolf I (1218-1291) の孫。伯父である神聖ローマ皇帝 Albrecht I (1255-1308) が、父親 Rudolf II (1270-1290) の引き継ぐべき財産の返還を拒んだため、1308年、皇帝が Reuß 川を渡ろうとしていたところを殺害した。このあたりの事情も、下記引用箇所を描き込まれている。

TELL Den Weg will ich euch nennen, merket wohl!

Ihr steigt hinauf, dem Strom der Reuß entgegen,
Die wildes Laufes von dem Berge stürzt –

PARRICIDA *erschrickt:*

Sch ich die Reuß? Sie floß bei meiner Tat.

TELL Am Abgrund geht der Weg und viele Kreuze

Bezeichnen ihn, errichtet zum Gedächtnis
Der Wanderer, die die Lawine begraben.

PARRICIDA Ich fürchte nicht die Schrecken der Natur,

Wenn ich des Herzens wilde Qualen zähme.

TELL Vor jedem Kreuze fallet hin und büßet

Mit heißen Reuetränen eure Schuld –
Und seid ihr glücklich durch die Schreckensstraße,
Sendet der Berg nicht seine Windeswehen
Auf euch herab von dem beeisten Joch,
So kommt ihr auf die Brücke, welche stäubet.
Wenn sie nicht einbricht unter eurer Schuld,
Wenn ihr sie glücklich hinter euch gelassen,
So reißt ein schwarzes Felsentor sich auf,
Kein Tag hats noch erhellt – da geht ihr durch,
Es führt euch in ein heitres Tal der Freude –
Doch schnellen Schritts müßt ihr vorüber eilen,

Ihr dürft nicht weilen, wo die Ruhe wohnt.
PARRICIDA O Rudolph! Rudolph! Königlicher Ahn!
 So zieht dein Enkel ein auf deines Reiches Boden!
TELL So immer steigend kommt ihr auf die Höhen
 Des Gotthardts, wo die ewgen Seen sind,
 Die von des Himmels Strömen selbst sich füllen.
 Dort nehmt ihr Abschied von der deutschen Erde,
 Und muntern Laufs führt euch ein andrer Strom
 Ins Land Italien hinab, euch das gelobte –

テル 道は教えて差し上げましょう、しっかりと心に留め置いて！
 激流となって山から流れ落ちてくる
 ロイス川を上流へ登って行くのですー

パリツィーダ 驚いて：
 ロイス川を見るのか？ 犯行現場を流れていた川だ。

テル 道は切り立った谷間を走っていますが、
 雪崩に埋もれた旅人たちを記念して建てられた
 たくさんの十字架が道標となっております。

パリツィーダ 自然の難所に震え上がったりはしないさ、
 この胸の苦悶を静めることができるなら。

テル 十字架に行き当たったら、そのたびに跪いて
 熱い後悔の涙を流して、犯した罪を償うのですー
 氷に覆われた山の背から吹きつけてくる

吹雪に見舞われることもなく、
 無事に難所の道を通り抜けることができたなら、
 水しぶきを散らす悪魔の橋に着きます。
 あなたの罪の重みで橋の底が抜けることなく、

無事にこれを渡り切ると、行く手には、
 黒々とした岩穴がぼっかり口を開けています、
 陽が射したことなど一度もない岩穴ですー
 この穴を抜けると、のどかで楽しい谷に出ます。
 ですが、足早に通り返さなければいけません、
 安らぎのあるところにとどまってはなりません。

パリツィーダ おお、ルドルフ！ルドルフ！王家のご先祖様！
 あなたの孫がこんな具合にあなたの領地を通るとは！

テル そうやってどんどん登ると、ゴットハルトの
 高みに出ますが、そこには空から降り注ぐ水だけを
 満々とたたえる万年湖があるのです。
 そこであなたはドイツの地に別れを告げ、
 勢いよく流れる別の川があなたを
 約束の地、イタリアの国へと導きますー

von M. Luserke. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker Verlag) 1996, S. 385-505, hier S. 503-504.

- 21) 「雌獅子 (Löwin)」は、スイスのいくつかの地域では「雪崩 (Lawine)」を表現する言葉。
- 22) 『ヴィルヘルム・テル』用に Fäsi から抜書したメモに、「[前略] 四季がしばしば同時に訪れる。氷。花々。果物。」とある。
- 23) Fäsi からの抜書によれば、「スイスの山々からたくさんの川がこの世に流れ落ちて、4つの大河となる」。ここで言及されているのは Reuß 川、Tessin 川、Rhein 川と Rhone 川であり、その源流は氷河水から湧き出ているため「分からないまま (verborgen)」なのである。
- 24) アルプスの峰々に映える夕焼け、または、朝焼け。Fäsi からの抜書には、「アルプスと雪山がダイヤモンドの王冠にたとえられている」。
- 25) **Der Taucher** の注釈：Vgl. FA, S. 77-82, 887-890.

シラーのカレンダーによれば 1797 年 6 月 5 日から 15 日の間に書かれ、『1798 年詩神年鑑』に発表され、『豪華版詩集』にも掲載される予定だった。

- 26) 『豪華版詩集』では、表題に Ballade とは記されていないかった。

いろいろと推測はあるものの、典拠の問題ははっきりしていない。シラーは恐らく、何か印刷されたものを典拠にしたわけではなく、「イビュコスの鶴 (Die Kraniche des Ibycus)」同様、ゲーテとの対話を通じてこの題材を知ったのであろう。典拠と目される資料で挙げられている伝説上の潜水夫の名前をシラーが知ったのは、このバラードの完成後、Herder から聞いてのことだった。

14 世紀から 17 世紀の間に、潜水夫の物語に関する伝承は多数存在していた。シラーのバラードに近い関係にあるのは、Kircher (Athanasius, 1602-1680) の『地下世界 (Mundus subterraneus)』に収録された「シチリアの潜水夫ペツェコーラの物語 (Die Geschichte vom sizilianischen Taucher Pescecola)」である。この物語は、Friedrich II (1194-1250) 時代のシチリアの有名な職業潜水夫に関するもので、潜水夫はニコラウス (Nicolaus) という名だったが、ペツェコーラ (Pescecola 「人魚、半魚人」)、つまりニコラウス・ペツェ (Pescecola = Pesce 「魚」 + Cola < Nicolaus → Nicolaus Pesce 「魚のニコラウス」) と呼ばれていた。Riemer (Friedrich Wilhelm, 1774-1845) のメモを手掛かりにすれば、シラーのバラードは、Matthaeus (Ioannes, ?-?) の書『発見家列伝 (De rerum inventoribus aureus libellus)』収録の「魚のニコラウスの物語 (Die Geschichte des Nicolaus piscis)」に依拠しているものと推定される。ゲーテが知っていた可能性のある典拠としては他に、Wünsch (Christian Ernst, 1744-1828) の『若者のための宇宙論談義 (Kosmologische Unterhaltungen für die Jugend)』、Otto (Friedrich Wilhelm, ?-?) の『海の発生史概論 (Abriß einer Naturgeschichte des Meeres)』が挙げられる。Otto は、いわゆる「水成論/説 (Neptunismus)」の主唱者の一人である。シラーとゲーテが、やはり Otto に言及している Kleist (Franz Alexander von, 1769-1797) のロマンス「潜水夫ニコラウス (Nicolaus der Taucher)」を知っていた可能性も排除できない。

ちなみに、「水成論/説」とは、花崗岩や玄武岩も含めたすべての岩石は原始の海水が結晶化し沈殿してできた水成岩であるとする考え方で、Werner (Abraham

Gottlob, 1749-1817) によって提唱された。一方で、Hutton (James, 1726-1797) に代表される「火成論／説」は、岩石の生成には火山が関与しており、花崗岩や玄武岩はマグマが凝固してできたものであると考えた。両者の間で論争が起こり、18世紀末には「火成論／説」の方が認められるようになった。ゲーテが「火成論／説」を支持していたことは、以下に引用する『クセーニエン (Xenien)』第161番から第163番の内容からも明らかである。

161 番

SCHÖPFUNG DURCH FEUER

Arme basaltische Säulen! Ihr solltet dem Feuer gehören,
Und doch sah euch kein Mensch je aus dem Feuer entstehn.

火による生成

あわれな玄武岩の柱よ！お前たちは火に帰属すると言われたが、
お前たちが火から生まれるのを見た者はこれまでのところいない。

162 番

MINERALOGISCHER PATRIOTISMUS

Jedermann schürfe bei sich auch nach Basalten und Lava,
Denn es klinget nicht schlecht, hier ist Vulkanisch Gebürg!

鉱物学的愛国心

誰もがみな足もとを試掘して玄武岩や溶岩も探すように、
ここに火山岩があるぞ！というのは聞こえが悪くないからだ。

163 番

KURZE FREUDE

Endlich zog man sie wieder ins alte Wasser herunter,
Und es löscht sich nun bald dieser entzündete Streit.

喜びは短し

結局それら（玄武岩の柱）は再び太古の海に引きずり込まれた、
そして、やがて間もなくこの論争の炎は鎮火する。

Johann Wolfgang Goethe: Xenien. In: ders.: MA, Bd. 4・1: Wirkungen der Französischen Revolution 1791-1797 I. Hrsg. von R. Wild. München (Carl Hanser Verlag) 1988, S. 776-825, hier S. 795. 丸カッコの中は筆者による注記である。

Körner は、シラーのバラードの中でも「海に潜る若者」がことのほか気に入っていた。彼が特に評価していたのは、「手袋 (Der Handschuh)」同様にこのバラードではある種の退屈さが回避されている点である。こうした退屈さは、例えば「ポリュクラテスの指輪 (Der Ring des Polykrates)」や「イビュコスイビュコスの鶴」に見られるように、ある特定の理念が前面に出てくることによって生じるものである。1797年7月9日（と11日）付シラー宛の手紙で、Körner は、「これらの詩は、またしても私のテーゼが正しいことを証明してくれる。君は、詩人であることを確信したのであれば、君のファンタジーにだけ依拠して詩作すればよい。形而上学的な理念を持ち出してファンタジーをかき乱してはいけない。」と述べている。

Humboldt (Wilhelm von, 1767-1835) も Körner とは違った観点からではあるが、「海に潜る若者」を「手袋」と同列に置いて論じている。1797年7月9日付のシラー宛手紙によれば、この二つの詩には、シラーのパラードの本質がじつにはっきりと現れ出ている。その本質とはつまり「最高度の客観性」であり、「ファンタジーによる悪しき産物」を一切放棄して、「分かりやすく、シンプルで、自然で、その上史実に基づく事件」を通して伝えられる「印象深い偉大さ、恐ろしさ、悲劇性」である。「海に潜る若者」は、「気高くて崇高な」、「民謡」調の詩となっている。

- 27) 注26で触れたように、Kircherの『地下世界』によればこの出来事は Friedrich II の時代にシチリアで起こったことであり、Kleist のロマンスも同じ時代・場所の設定となっている。1296年にナポリ・シチリア王となった Friedrich II (1272-1337) の時代のことだという説もある。
- 28) 1797年9月25日付シラー宛の手紙によれば、ゲーテは、スイスへ向かう旅の途上 Schaffhausen 近郊でライン瀑布 (Rheinfall) に立ち寄った際に、この箇所^の詩句を思い出した。これに対してシラーは、1797年10月6日付ゲーテ宛の手紙で、自分としては単に水車の様子をじっくりと研究しただけであり、それ以外は『オデュッセイア (Odysseia)』における Homeros (?-?) のカリュプディス (シチリア島のメッシーナ海峡にいたとされた怪物で、渦潮を擬人化したもの) の描写に依拠したのだが、そのおかげで「ひょっとしたら自然な描写を保持できたのだろう」と伝えている。

ちなみに、『オデュッセイア』第12歌235-246行では、カリュプディスの様子が次のように描写されている。

一方にはスキュレ (スキュラ) が控えているし、他方では恐るべきカリュプディスが、凄まじい勢いで海の塩辛い水を吸い込んでいる。そして吐き出す時には、さながら燃えさかる火にかけた鍋の如く、その全体がぐらぐらと煮えたぎり、吹き上げられた泡がしぶきとなって、二つの岩の頂きに降りかかる。ところが塩辛い海水を嘔み下す時には、全体が渦をなしてその内側が露わに見える、岩はあたり一面に凄まじく鳴り響いて、底には砂で青黒く見える地面が現われる。一同は青白い恐怖に襲われたが、われらが身の破滅を恐れてカリュプディスに気をとられ、その方を眺めている際に、スキュレは腕力最もすぐれた六人の部下を、うつろな船からさらって行った。

ホメロス (松平千秋訳)『オデュッセイア』(上) 岩波文庫、321-322ページ。なお、上に示した行数についてはドイツ語訳 (Homer: Odyssee. Griechisch / Deutsch. Übersetzung, Nachwort und Register von R. Hampe. Reclam (Universal-Bibliothek Nr. 18640) の行数に依拠している (以下、『オデュッセイア』への言及、引用に關してはすべて同じ)。丸カッコの中は筆者による注記である。

- 29) この箇所でも、シラーは『オデュッセイア』の第12歌437-439行を念頭に置いていたようである。注37を参照のこと。
- 30) 1797年7月9日 (と11日) 付シラー宛の手紙によると、Körner は、「暗闇 (Finsternis)」を「深紅色 (purpurn)」と形容することに不満だった。これに対し

て、1797年7月21日付 Körner 宛の手紙でシラーは、「ガラス製の潜水鐘の中では、潜水夫には本当に光が緑色に、陰影が深紅色に見えるのです。だからこそ、彼が海中から戻ってきたときに、今度は逆に光をバラ色（淡紅色）だと言わせたのです。バラ色（淡紅色）に見えたのは、これに先立って緑色の輝きを見ていた結果なのです。（der Taucher sieht wirklich unter der Glasglocke die Lichter grün und die Schatten purpurfarben. Eben darum laß ich ihn wieder umgekehrt, wenn er aus der Tiefe heraus ist, das Licht rosicht nennen; weil diese Erscheinung nach einem vorhergegangenen grünlichen Scheine so erfolgt.）」と言って反論した。「だからこそ」以降で言及されているのは、第16節1~2行目「王様万歳！バラ色の光の中で／生きられることの喜びよ！（Lang lebe der König! Es freue sich, / Wer da atmet im rosigten Licht!）」の箇所である。

どうやらシラーの描写は、色彩論に関するゲーテとの会話に依拠しているようである。実際、『色彩論（Zur Farbenlehre）』第1部「教示編（Didaktischer Teil）」第1編「生理的色彩（Physiologische Farben）」の第57節、第78節、第2編「物理的色彩（Physische Farben）」の第164節には次のような記述がある。「要求された色彩（eine/die geforderte Farbe）」というのは、ある色を見た際に、目の持つ生理学的機能によって網膜上に生み出される、その正反対の色彩のことである。

57.

[...] Die Purpurfarbe an dem bewegten Meer ist auch eine geforderte Farbe. Der beleuchtete Teil der Wellen erscheint grün in seiner eigenen Farbe, und der beschattete in der entgegengesetzten purpurnen. Die verschiedene Richtung der Wellen gegen das Auge bringt eben die Wirkung hervor. [...]

[前略] 荒海に認められる深紅色もまた、要求された色彩である。波の照らし出された部分はその固有の色（見る者の視点のとり方や光の照射の影響を受けない、対象そのものに帰属する色）である緑色に見えるが、陰になった部分はその真逆の色である深紅色に見える。目に対する波の角度が異なることで、同じ作用が引き起こされる。[後略]

78.

Wenn Taucher sich unter dem Meere befinden und das Sonnenlicht in ihre Glocke scheint, so ist alles Beleuchtete, was sie umgibt, purpurfarbig (wovon künftig die Ursache anzugeben ist); die Schatten dagegen sehen grün aus. [...]

潜水夫が海に潜り、日の光が潜水鐘（釣鐘型の潜水装置で、ホースにより圧縮空気を送り込んで水中での作業を可能にできる）の中に射し込むと、光に照らし出された彼らの周囲のものはみな深紅色になる（その原因については後ほど述べる）。これに対して、陰影は緑色に見える。[後略]

164.

Der Grund des Meeres erscheint den Tauchern bei hellem Sonnenschein purpurfarbig, wobei das Meerwasser als ein trübes und tiefes Mittel wirkt. Sie

bemerken bei dieser Gelegenheit die Schatten grün, welches die geforderte Farbe ist. (78.)

海底は、陽光が明るく射し込んでいるときは潜水夫の目に深紅色に見えるが、これは海水が不透明度の強い媒体として作用するからである。その際に彼らが認める陰影の緑色は、要求された色彩である。(第 78 節参照)

Johann Wolfgang Goethe: MA, Bd. 10: Zur Farbenlehre. Hrsg. von P. Schmidt. München (Carl Hanser Verlag) 1989, S. 43-44, 50, 70, 1085 (Anm. 50-29). 第 78 節の二つ目の丸カッコ、そして、第 164 節の丸カッコの中はゲーテ自身による注記だが、それ以外の丸カッコの中は筆者による注記である。

- 31) Und ob's hier dem Ohre gleich ewig schlief は、Und obgleich es hier dem Ohre nie vernehmbar war の意味。不定代名詞 es はこれに続く詩句の中でも繰り返し使われているが、『崇高について (Vom Erhabenen)』の記述によれば、「不特定のものは「自分の考えに応じてイメージを具体的に描き上げる自由を想像力に与えるので、[中略] 恐怖を醸し出す要素となる」からである。Vgl. Friedrich Schiller: Vom Erhabenen. In: ders.: FA, Bd. 8, S. 395-422, hier S. 417.
- 32) Humboldt は 1797 年 7 月 9 日付シラー宛の手紙で、「竜に関しては、作り話やファンタジーの中の生き物なので、確かにより自由に扱うことができるが」、山椒魚やイモリは深海には生息していないだろうと注意喚起をしている。
- 33) 『ゴットルフ骨董品陳列室 (Gottorfische Kunst-Kammer)』の中で、著者 Olearius/eigt. Ölschläger (Adam, 1599-1671) は Klippenfisch を、「肉食で、貪欲で、どう猛な歯をした魚」であると解説している。Vgl. Adam Olearius: Gottorfische Kunst-Cammer. Schlepzig (Holwein), 1666, S. 53. (<http://diglib.hab.de/drucke/24-1-1-phys/start.htm>, 最終閲覧日 2021 年 12 月 31 日)

ちなみに、同書には注 26 で言及した Kircher による潜水夫の物語のドイツ語訳が収録されているが、シラーがこの本を知っていたかどうか、利用したかどうかは明らかではない。このドイツ語訳の概要は以下の通りである。

フリードリヒ二世の時代——1200 年頃だったに違いない——シチリアに一人の潜水夫、あるいは、真珠や珊瑚を採る漁師ニコラウスがいた。幼い頃から水に親しみ、泳ぎと潜水の腕を磨き、珊瑚や真珠を採って生計を立てていた。海での暮らしが好きでたまらず、四、五日間海に行ったりきりで、生魚を食べていることがよくあった。そのせいで普通の体質ではなくなってしまう、水中でも水の外でも息をしないでまる一日暮らすことができるようになり、人間というよりはむしろ両生類に似ていた。手紙を袋に入れて濡れないように海を泳いで運ぶことができたので、配達人として使われることもしばしばあった。ひどい嵐の中でガレー船に出くわしたりすると、船の乗組員たちは彼を海の怪物だと思った。船に引きあげられ、食事を振る舞ってもらうこともあったが、少し言葉を交わすと再び海に入り泳ぎ去った。

ある時、王がシチリアのメッシーナに滞在したことがあったが、ニコラウスについて信じられないような話をいろいろと耳にしていたので、この男に会いたいと思った。数日間にわたり水陸での搜索が行われ、見つかったニコラウス

は王に謁見することになった。海中の不思議な話をあれこれと聞いた王は、近くのカリュプデイスの状態を知りたくてたまらなくなった。カリュプデイスはシチリアとイタリア本土の間に横たわる危険な場所で、ティレニア海とシチリアの海がぶつかり合い、激しく荒れ狂うところである。そこにはスキュラという岬、切り立った岸壁もある。風が吹きつけると、洞穴がいくつか開いているせいで、不協和音のような音を長く響かせて人々を震え上がらせ、荒天のときに船があまりにも近くでこの音を聞くと、必ず座礁して粉々になった。これに向かい合ってカリュプデイスが大きな口を開け、海水が流れ込んだかと思う間もなくすぐまた恐ろしく荒れ狂いながら沸き上がり、船で通り抜けようとする者は、危険を冒してカリュプデイスとスキュラをかきさなければならぬ。この危険な場所を見極めようと、王はニコラウスに、深淵に潜ってその様子を報告するよう命じた。ニコラウスがその気になるように、そして、潜る際の目印となるように、王は金杯をその場所に投げ込ませ、この杯を再び持ち帰ったらお前にくれてやろうと約束した。ニコラウスは王のお望み通りに最善を尽くすと約束し、嬉々として渦潮に潜り、45分経つと海中から再び姿を現して、手に持った杯を高々と掲げた。その後王宮に招かれ、今回の任務遂行でかなり疲れていたもののたっぷりと食事を供されて元気を養い、王の前に召し出されると、王の質問に対して次のように答えた。

王様、あなた様から命じられたことを、私は遂行いたしました。ですが、私が身をもって経験したことをあらかじめ知っておりましたら、たとえあなたが王国の半分をくださるとおっしゃっても、決してあなた様の命令にしたがおうとは思わなかったでございましょう。と申しますのも、この場所が私だけでなく、魚たちにとってさえ危険な場所となっている四つの要因があるからでございまして。その一つは、深い深淵から吹き上げてくる水の強力な力。いかに屈強な男でもこれに抗うことはできず、私もまたその中を突き進むことができません。この激流をかわしながら海底を目指すしかありませんでした。二つ目は、いたるところに突き出している、鋭く尖った無数の岩礁。私はその合間を縫って、命の危険を感じながら、皮膚に傷を負いながら海底に到達いたしました。三つ目は、海底を流れる激流。これが岩礁の間を流れ、深淵から吹き上げてくる水とぶつかり合う様子は実に恐ろしく、恐怖のあまり体がこわばってしまい死ぬかと思う程でございました。四つ目が、この世で一番の大男さえ上回りそうな巨大な胴体を持った、薄気味悪いポリプ。これが無数に岩礁の側壁に張りついて長々と足を伸ばしていましたが、その長さは見たところ10フィート以上ございました。そのうちの一匹にでも不意打ちを食らわされていたら、私はからめ捕られて圧死していたことでしょう。すぐ近くの岩礁の間には巨大なアザラシが何匹も陣取っていて、口には三重の歯が生えていました。イルカと比べてそれほど小さいわけではございません。その口にばかりととらえられたら、生き長らえることはできないでしょう。ニコラウスがこうした話を理路整然と語ると、ところで杯はすぐに見つかったのかと王が尋ねた。ニコラウスの答えはこうだった。寄せては返しぶつかり合う水流のせいで、杯は垂直に、あるいはまっすぐに海底へ沈むことができず、水平方向にこちらへこちらへと流されて、とうとう平坦で、いく分窪んだ岩礁に落ちました。それを見つけて拾い上げたのでございます。もし渦潮に飲み込まれて深淵に落ちていたら、私は

杯を手に入れることができなかつたでございましょう。その深淵は、真っ暗な夜のように見えました。もう一度潜ってみる気はあるかと王が尋ねると、ニコラウスは「いいえ」と答えた。しかし、ドゥカーテン金貨をたっぷり詰め込んだ袋を結わえた杯が投げ込まれると、ニコラウスは自ら進んで海中に潜り、二度と姿を現さなかつた。ひょっとしたら、ポリプや砂虎サメにでも捕まってしまうのだらう。

Vgl. Olearius: a. a. O., S. 50-52. (最終閲覧日 2021 年 12 月 31 日)

- 34) Hammer = Hammerhai.
 35) ラテン語の larva 「悪霊、亡霊、仮面」由来の語だが、ここでは「異様な／恐ろしい／醜い／嫌悪すべき顔 (Fratzen)」をも意味している。
 36) ポリプ (腔腸動物の基本形の一つ) のことが話題となっている。Kircher もニコラウス・ベッシュに同様の生き物について報告させている。Vgl. Olearius: a. a. O., S. 51. (最終閲覧日 2021 年 12 月 31 日)
 37) この箇所は、『オデュッセイア』第 12 歌 431~446 行の描写と似ている。

折しもカリュプデイスは、塩辛い海水を呑み込んだところであったが、わたしは高い無花果の樹めがけて躍り上がり、蝙蝠の如くそれにしがみついていた。しっかりと踏んばる足場もないし、樹を攀じ登ることもできぬ。根は遙か下にあるし、長く太い枝も頭上に高く懸かって、カリュプデイスに蔭を落しているのだ。わたしは、カリュプデイスが再び帆柱と竜骨を吐き出すまで、じっと耐えて樹にしがみついていた。[中略] 漸く船材はカリュプデイスの淵から姿を現わした。わたしは手足を離して上から空中を飛び、長い船材の傍らの、水中に音を立てて落下した。船材にまたがると、両手を櫂代りにして必死に漕ぐ。人と神との父なる神は、幸いに再びスキュレ (スキュラ) がわたしの姿を見ることをお許しにならなかったが、さもなくばわたしは恐るべき破滅を免れることができなかつたであらう。

ホメロス (松平千秋訳) 『オデュッセイア』(上) 岩波文庫、330 ページ。丸カッコの中は筆者による注記である。

- 38) **Die Bürgschaft** の注釈 : Vgl. FA, S. 26-30, 858-860.

1798 年 8 月 27 日から 30 日の間に書かれ、『1799 年詩神年鑑 (Musen-Almanach für das Jahr 1799)』に発表された。

シラーは、ローマ時代の文法学者 Hyginus (Gaius Iulius, 前 64 頃-後 17) の寓話・逸話集をゲーテから入手していた。その中の寓話第 257 番「非常に強い友情で結ばれていた男たち」から、古典古代および中世の文献でたびたび伝承されてきたこの題材を借用した。

シラーの『崇高に関して (Über das Erhabene)』の内容に照らし合わせると、このバラードで物語られている出来事は、「行為の崇高 (das Erhabene der Handlung)」の概念と結びつけて考えることができる。この種の崇高さに求められるのは、ある人が苦悩ゆえに道徳的行為を思い止まったりしないだけでなく、その

苦悩がまさにその人の道徳的行為から帰結していることである。Vgl. Friedrich Schiller: *Über das Erhabene*. In: ders.: FA, Bd. 8, S. 822-840.

『豪華版詩集』に掲載予定だった「ダモンとピュティアス (Damon und Pythias)」もこの題材の伝承に依拠したものだが、Hyginus 以外の手になる伝承である。

- 39) 前 405 年以降シチリア島 Siracusa の僭主となった Dionysios der Ältere (前 430-367) のこと。
- 40) 『豪華版詩集』では Damon。
- 41) Grimm の辞書によれば、この gefreit は angetraut で言い換えることができる。Vgl. Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm, digitalisierte Fassung im Wörterbuchnetz des Trier Center for Digital Humanities, Version 01/21, <<https://www.woerterbuchnetz.de/DWB>>, abgerufen am 04.12.2021.
- 42) ここでは一般的な töten の意味。
- 43) gebeut < bieten
- 44) FA の注ではこの箇所が「ホメロスの (homerisch)」であり、『イリアス (Ilias)』の第 10 歌 157 行を参照するようにとあるが、ゼウスへの言及はあるもののどのような関連があるのかははっきりしない。ちなみに、『イリアス』の該当箇所は、アカイア軍の総帥アガメムノンがトロイア軍に対する不安に駆られて眠られず、諸將と協議をしようと考え、その意を受けた騎士ネストルが眠っているオデュッセウス、ディオメデスを起こして回る場面である。ホメロス (松平千秋訳)『イリアス』(上) 岩波文庫、310 ページ参照。
- 45) 『豪華版詩集』では stürzt。
- 46) ここでの heilig は heilbringend の意味。
- 47) この名前は、自由に選んでつけられたもの。
- 48) 市門のところで、例えば司法事件のような公的問題の審理が行われており、刑場も付設されていた。
- 49) ローマ時代の作家 Maximus (Valerius, ?-?) による『有名言行録 (Factorum dictorumque memorabilium libri)』第 4 巻第 4 章「友情の絆について (De amicitiae vinculo)」には、ダモンとフィンティアス (ここでは Phintias となっている) の話が収録されており、シラーととてもよく似た形で締め括られている。つまり、ディオニュシオスは、最大限の愛情によって二人の友情の絆の中で第三の地位を保持するつもりだから仲間に入れてほしいと懇願する。
- また、Cicero (Marcus Tullius, 前 106-43) の『友情について (Laelius de amicitia)』52 には、暴君の生は疑心暗鬼と不安に満ちたものであり、友情の介在する余地はないとの記述がある。Vgl. Cicero: *Laelius de amicitia* / *Über die Freundschaft*. Lateinisch / Deutsch. Übersetzt und herausgegeben von M. Giebel. Reclam (Universal-Bibliothek Nr. 19293) 2014, 2015, S. 63-65.
- さらに、同じく Cicero の『トゥスクルム荘対談集 (Tusculanae disputationes)』第 5 巻 57-63 には、ディオニュシオスに関する次のような言及がある。

(57) 25 歳で支配権を奪い取った後、ディオニュシオスは 38 年間シラーズ僭主だった。この町はとても美しく、市民は豊かに富を蓄えていたが、彼によって抑圧され隷従を強いられていた。信頼の置ける作家たちが伝えるところ

によると、彼の暮らしぶりとはとても節度があり、行動力があり勤勉だったが、生まれつきたちが悪く公正さを欠いていた。したがって、真実を直視する人々から見ると、彼は非常に不幸な男に見えたに違いない。何でも意のままになると思った時でさえ、彼は望んだものを手に入れられなかったからである。

(58) デイオニュシオスには立派な両親がいて上流階級の出であり——もちろんこの点については別の伝承もある——同年輩の友人がたくさんいて親戚づきあいもあり、ギリシアの慣習にしたがって若者の恋人も何人かいた。しかし、彼は誰一人として信用しておらず、裕福な家庭から見繕って解放してやった奴隷たち、よその土地からやって来た野蛮な非ギリシア人たちに自分の身辺警護を任せていた。こんな具合に、彼は不当な支配欲のために、いわば自分で自分を牢獄に閉じ込めていたのである。それどころか、理髪師に自分の首を晒したくないばかりに、娘たちに散髪をさせていた。娘たちは、下女に似つかわしい理髪師の汚れ仕事を引き受け、父親の髭を剃り散髪していた。ところが、娘たちが成長して大人になると剃刀を取り上げ、自分の髭と髪を真っ赤に焼けたクルミの殻で焼き払わせた。

(59) デイオニュシオスには二人の妻、シラクーザ出身のアリストマケーとロクロイ出身のドリスがいたが、夜二人のもとへ通う際は、前もって、細心の注意を払ってすべてを調べさせた。寝室のベッドの周りに幅広の濠をめぐらせ、この濠に木製の小橋をかけて渡っていたので、寝室のドアを開めた後はこの小橋を自分で取り除けた。公共の演壇に立とうとはせず、いつも高い塔の上から演説をしていた。

(60) またあるとき、ボール遊びをしたくなって——彼はボール遊びが好きでよくやっていた——チュニックを脱ぎ、愛していた若者に自分の剣を手渡したことがあったそうだ。すると、友人の一人が冗談半分で「この若者に命をお預けになるのですね」と言い、若者が笑ったので、彼はこの二人を殺させた。一人は、彼を始末する方法を教示したという理由、もう一人は、笑ってこれをよしと認めたという理由である。この一件は、生涯でこれ以上の重荷はないというほどに彼を苦しめた。熱愛していた若者を殺させてしまったのだから。このように、自制心のない者の欲求は真逆の方向に引き裂かれる。一方の欲求を立てれば他方が立たず、というわけである。

(61) もちろんこの僭主は、自分の幸福度について自ら判決を述べていた。ご機嫌取りの一人であるダモクレスが、会話の中で彼の軍隊、権力、支配権の大きさ、溢れるばかりの財産や絢爛豪華な宮殿に触れ、「あなた様ほど幸せな人はいまだかつておりません」と言うと、デイオニュシオスは、「ダモクレスよ、この暮しが楽しいと思うなら、自分で味わって、私の幸福を確かめてみるつもりはあるか?」と尋ねた。ダモクレスがそうしたいと答えると、彼はこの男を、技巧を凝らした図柄を刺繍した、とても美しい織物で覆われた金の長椅子に座らせ、銀や金の打ち出し細工の食器を並べて食事の用意をした。それから、選りすぐりの美形の若者を食卓に侍らせ、ダモクレスの指示にしたがって粗相のないようにお仕えしろと命じた。

(62) 香水や花冠が用意され、芳香剤が焚かれ、食卓の上には特上の料理が並べられた。ダモクレスは幸せだと思った。この贅を尽くした饗宴の最中に、デイオニュシオスは、一本の馬の毛に結びつけられた抜き身の剣を、幸せなダ

モクレスの首筋を脅かすように天井から吊るさせた。こうなるともうダモクレスは美しい給仕や技巧を凝らした銀器に目をくれることも、食事に手を伸ばすこともできず、そのうちに花冠さえ落ちてくる始末で、とうとう、もう幸せになりたいとは思わないのでおいとまさせていただきたい、と憎主に頼んだ。つねに何らかの恐怖に怯えている人にとって幸福は存在し得ないということを、ディオニュシオスは十分に分からせようとしたのだと思うが、どうだろうか？ また、正義に立ち返り、シラクザ市民に自由と権利を返すことなど、彼にはできない相談だった。若い頃、軽はずみに過ちを犯して犯罪に手を染めていたので、分別を持ったりしたら自分の身の安全が覚束なくなるからだった。

(63) しかし、友情はあてにならないと恐れる一方で、いかにディオニュシオスが友情を渴望していたかについては、ピュタゴラス派の二人の男（ダモンとフィンティアス）の話で明らかになる。彼は、死刑を宣告された男（フィンティアス。ディオニュシオスに対して謀反を企てたかどで死刑を宣告された）の代わりにもう一人（ダモン）を人質に取ったが、その死刑囚が自分のために人質となった男を解放しようと処刑の時間に姿を現すところ言った。「どうか私をお前たちの三人目の仲間に加えてもらえないか！（Könnte ich doch als dritter eurem Freundschaftsbund zugerechnet werden!）」ディオニュシオスにとって、友人との交流、共同生活や、そもそもどんな種類のものであれ気の置けない会話を欠かすことは忌々しきことであった。彼は子どもの頃から教養を身につけ、上質な学芸をたしなみながら育ち、ことのほか音楽に熱を入れていたからである。おまけに、彼は悲劇詩人でもあった——どの程度優れた詩人だったのかは問題ではない。他のジャンルに比べてこのジャンルでは、どういう訳か、誰もが自分の作品を素晴らしいと思っている。これまでに知り合った詩人（へぼ詩人アクイニウスとも親しかった）はみな、自分が最高の詩人だと思っていた。みな自分の作品が気に入っている、というわけだ。——ディオニュシオスに話を戻すと、彼は人々との洗練されたつき合いをいずれも断念せざるをえず、逃亡者、犯罪者、無教養な人たちと暮らしていた。自由に値する人、あるいは、そもそも自由でありたいと思う人が自分の友人になるとは考えていなかったからである。

Cicero: *Tusculanae disputationes / Gespräche in Tusculum*. Latein / Deutsch. Übersetzt und herausgegeben von E. A. Kirfel. bibliographisch ergänzte Ausgabe. Reclam (Universal-Bibliothek Nr. 5028) 2008, S. 426-433, 528 (Anm. 74, 75). 丸カッコの中の日本語は、上記ドイツ語訳につけられた注に基づく筆者の注記、丸カッコの中のドイツ語は、上記ドイツ語訳の該当箇所を引用したものである。

ちなみに、太宰治（1909-1948）はシラーのこのバラードから題材をとって『走れメロス』を書いた（『新潮』1940年5月号に発表）。

シラーと太宰を少々比較してみると、まず大きく異なるのは冒頭のシーンである。シラーでは、いきなりメロスが短剣を懐にしてディオニュシオスのもとに忍び込み、「この町を暴君の手から救うのだ！」と宣言する。しかし、そもそもディオニュシオスがどうして暴君なのか、彼がいったい何をしたのかまったく言及されないし、その辺の事情は最後まで明かされない。太宰では、王がだれに対しても強い不信任を抱いていて、町民ばかりか自分の身内まで殺していると、町民に語らせて

いる。これによって、「人の心は信じるに値するかどうか」というテーマもはっきりと提示されることになる。また太宰では、主人公がこの町に来た理由も、竹馬の友で石工をしているセリヌンティウスを訪ねてきたのだと明記されている。そしてこのセリヌンティウスが、彼のために人質となるのである。

もう一つ、太宰がシラーと大きく異なるのは、メロスの心理描写、しかも、その心理的葛藤を描き出している点である。シラーのメロスは、ある意味で人間離れた真直ぐな男である。外的障害物に道を阻まれるはするが、期限内に町に帰り着くという目標に向かって、途中で悩んだり足を止めたりすることはせず一直線に進んで行く。これに対して、太宰のメロスは非常に人間的に描かれていると言えるだろう。例えば、追いはぎの団を撃退したあと精根尽き果てたメロスは、かなり自暴自棄になって思い悩む。このままでは笑いものになってしまうとか、ここまで努力したのだから期限内に帰れなくても自分は卑劣漢ではないとか、あるいは、そもそも正義だとか信実だとか愛だとかまったくくだらないもの、等々。そんな心理的紆余曲折を経て町に帰り着いたメロスは、途中で親友を裏切りそうになったことを白状する。セリヌンティウスの方も、一度だけ友の気持ちを疑ったことを告白する。

以上、シラーと太宰の比較については、日本放送協会・日本放送出版協会編『NHK ラジオドイツ語講座』2006年12月号、90ページに掲載した記事を若干手直しして再録したものである。また、『走れメロス』については、太宰治『走れメロス』（同『走れメロス』新潮文庫、2010年、163～182ページ）を参照した。

50) **Gruppe aus dem Tartarus** の注釈：Vgl. FA, S. 261, 1047.

『群盗 (Die Räuber)』執筆とほぼ同じ頃、1780年、あるいは1781年に完成し、『1782年詞華集』に発表された。Vergilius (Publius Vergilius Maro, 前70-19)の『アエネーイス (Aeneis)』における冥界の描写に触発されて書かれ、特に第1詩節は、第6歌557行「そこから呻き声が洩れてきた」を詩的に拡張したものである。

ちなみに、『アエネーイス』の第6歌では、トロイア王家の子孫でありローマ人の祖であるアエネーアースが、シビュラの巫女デーポベーに伴われて冥界へ旅をする。その道すがら、見るも無残な姿をしたデーポプス（トロイアの王子パリスの弟）と出会う。時の経つのも忘れて言葉を交わす二人に巫女が忠告をし、デーポプスが立ち去ると、

アエネーアースはわれに返ってあたりを見回した。すると突然、左手の崖下に三重の壁に囲まれた幅広い城砦が見えた。^{タルタラ}地獄へ向かう^{フレグトーン}炎之川の燃える急流がそこを囲繞し、激しい音を響かせて岩をころがしていた。

正面には巨大な門が建っていて、硬い金剛石の柱で^{しょうこん}荘厳されていた。それは人間の力などではびくともせぬ強固な門だった。たとえ天上の神々が戦争を仕掛けてもここを突破することは不可能であったろう。

そこには鉄の塔が空中にそびえ、そこで血で濡れたマントを纏った^{ティーンシボネー}夜又吉蔗^{ウェスティアブルム}（夜又〔フリア〕のひとり）が、夜も昼も眠らずに玄関前広場の見張り番を務めていた。

そこから呻き声が洩れてきた。また激しく殴打する鞭の響きが聞こえ、さら

に鉄の軋み、鎖を引きずる音が加わった。

アエネーアースは立ち止まり、怯えつつこれらの騒音に聞き耳を立てた。

ウェルギリウス（杉本正俊訳）『アエネーイス』新評論、175～177 ページ参照。なお、上に示した行数については、ウェルギリウス（泉井久之助訳）『アエネーイス』（上）岩波文庫を参考にしている。

- 51) 永遠の描く輪には始まりも終わりもなく、有限な現世と時間に勝利を収める。サトルヌスはギリシアのクロノスに相当し、時間の擬人化として解されているが、冥界ではまったく力を持たない。
- 52) **Hoffnung** の注釈：Vgl. FA, S. 117, 925-926.
1797 年春に完成したと推測され、恐らくは、1797 年 4 月 27 日に Spener (Johann Karl Philipp, 1749-1827) に送られた「小品集 (Die Kleinigkeiten)」の中に含まれていた。『ホーレン (Die Horen)』誌第 10 号 (1797 年) に発表され、『豪華版詩集』にも掲載予定だった。「理想 (Die Ideale)」と対をなす作品。
- 53) 『豪華版詩集』では locket。